

九州大学

次世代型大学教育開発拠点

令和元年度 活動報告書



九州大学 基幹教育院 Center for the Future Development
of Education, Kyushu University
次世代型大学教育開発センター

目次

1. はじめに	3
2. 次世代型大学教育開発拠点について	4
2-1. 組織概要	4
2-2. メンバー構成	5
3. 活動の総括	6
4. FD/SD 開催実績	7
5. FD/SD 開催報告	11
4 本拠点事業への要望	53
5 おわりに	55

1.はじめに

九州大学基幹教育院は、文部科学省教育関係共同利用拠点に平成28年7月に認定されました。同時に、その運営母体として次世代型大学教育開発センターが発足し、現在に至っております。拠点活動におきましては、多くの教職員の皆様、外部講師の先生、そして、拠点活動にご参加頂いた皆様大変お世話になっております。センターを代表し、ここに厚く御礼申し上げます。

さて、令和元年度の活動を振り返ってみたいと思います。今年度は、当拠点では合わせて16回の公開研修会等を開催しました。それらの研修会には、全国から合計564名（内訳：学内150名、学外414名）もの皆様にご参加頂きました。本年度も順調に教育関係共同利用拠点としての役割を果たすことができたものと考えております。しかしながら、本年度末2～3月には新型コロナウイルスの感染が拡大したため、残念ながら5件の研修会を令和2年度に延期せざるを得ませんでした。一方で、今年度のユニークな活動として、九州大学における初年次教育改革の記録を取りまとめた書籍『アクティブ・ラーナーを育む ー新時代を拓く基幹教育ー』（九州大学出版会）を出版することができました。これにより、基幹教育院を中心として行われた科目開発の事例を広く周知することができたと考えております。また、リベラスサイエンス教育に関する研修会を開催するなど、新しい科目の開発を目指した取り組みをスタートしました。今後、科目の具体化、試行などが予定されております。

我々次世代型大学教育開発センターは、令和元年から第二期をスタートさせました。当面の間、新型コロナウイルス感染拡大の影響も懸念されますが、オンラインでの研修会の開催を行うなど、皆様に必要とされる科目開発、FD/SD、専門的職員養成プログラムを提供していく予定です。センター関係者一同、努力してまいりますので、どうぞ皆様からの変わらぬご指導とご支援をお願い致します。

九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター長
野瀬 健

2. 次世代型大学教育開発拠点について

2-1. 組織概要

平成 28 年 7 月に九州大学基幹教育院が文部科学省教育関係共同利用拠点¹「次世代型大学教育開発拠点」として認定されたことに伴い、拠点事業を担う「次世代型大学教育開発センター」²が発足した。本拠点事業では、日本の高等教育機関が教学マネジメントや内部質保証システム構築を行うための基盤を形成することを目指して、

- ① 分野の壁を越えた新科目の開発を目的としたリベラルサイエンス教育開発
- ② アクティブラーニング手法や授業デザインの開発と共有を目的とした大学教職員職能開発
- ③ 学長のリーダーシップや教学マネジメントを支える人材の養成を目的とした専門的職員養成

の 3 領域において公開 FD/SD の開発と提供を行っている。実施体制としては、それぞれの領域に対応する「リベラルサイエンス教育開発モジュール」「大学教職員職能開発モジュール」「専門的職員養成モジュール」の 3 部門を設けている。

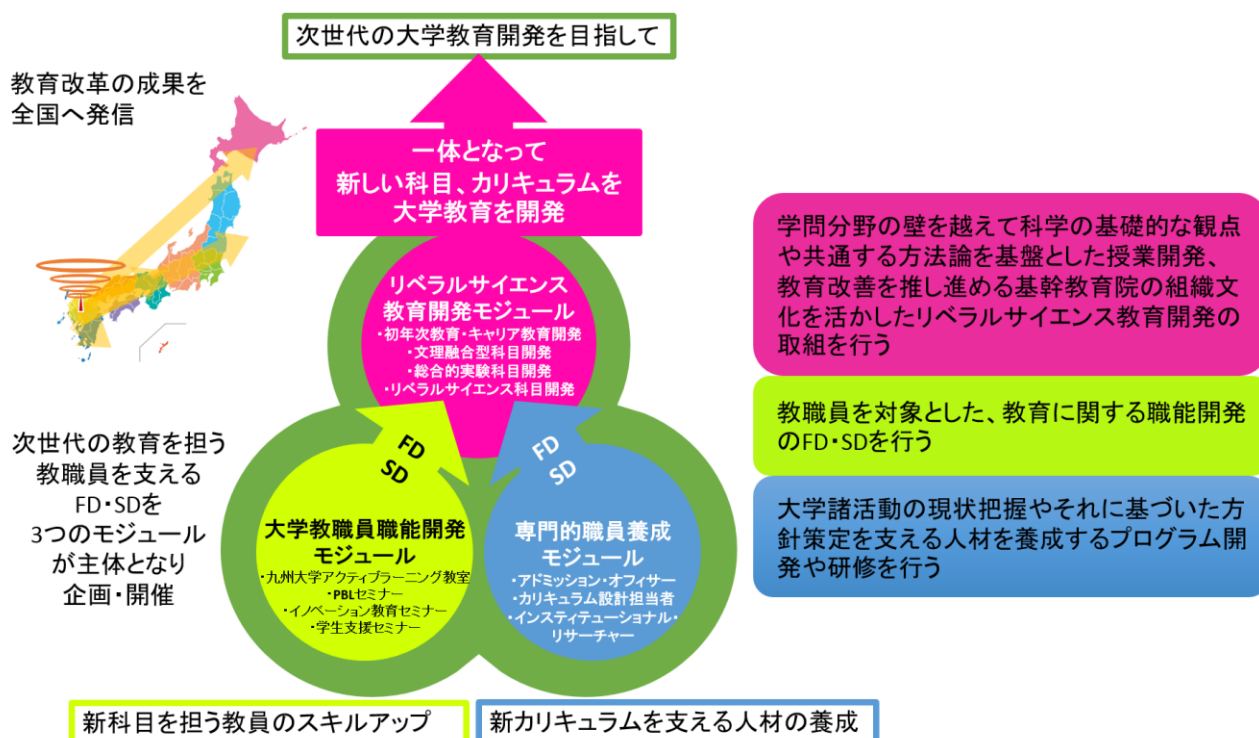


図 1：次世代型大学教育開発拠点の概念図

¹ 教育関係共同利用拠点について：http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigakukan/1292089.htm

² 次世代型大学教育開発センターウェブサイト：<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/>

2-2. メンバー構成

■ 拠点長

谷口 説男（九州大学 副理事・基幹教育院長・教授）

■ 運営委員会

氏名	所属機関名	役職	専門分野
池田 史子	山口県立大学 国際文化学部	教授	日本語学
川島 啓二	京都産業大学 共通教育推進機構	教授	高等教育論
佐藤 仁	福岡大学 人文学部	准教授	比較教育学
西郡 大	佐賀大学 アドミッションセンター	教授	教育情報学
橋場 論	福岡大学 教育開発支援機構	准教授	高等教育論
松下 佳代	京都大学 高等教育研究開発推進センター	教授	教育方法学
山本 以和子	京都工芸繊維大学 基盤科学系	教授	教育社会学
谷口 説男	九州大学 基幹教育院	院長・教授	確率解析
野瀬 健	九州大学 基幹教育院	センター長・教授	生物化学
小湊 卓夫	九州大学 基幹教育院	副センター長・准教授	高等教育マネジメント
原田 恒司	九州大学 基幹教育院	教授	素粒子理論
三木 洋一郎	九州大学 基幹教育院	教授	医学教育学
深堀 聰子	九州大学 教育開発推進本部	教授	教育社会学
木村 拓也	九州大学 人間環境学研究院	准教授	教育社会学

■ 専門委員

氏名	所属機関名	役職	専門分野
大橋 浩	九州大学 基幹教育院	副院長・教授	認知言語学
山田 琢磨	九州大学 基幹教育院	教授	プラズマ物理学
飯嶋 裕治	九州大学 基幹教育院	准教授	倫理学
小島 健太郎	九州大学 基幹教育院	准教授	素粒子物理学
立脇 洋介	九州大学 アドミッションセンター	准教授	教育心理学

■ 拠点事務局スタッフ

氏名	所属機関名	役職	専門分野
小林 良彦	九州大学 基幹教育院	特任助教	原子核物理学
岡村 香世子	九州大学 基幹教育院	テクニカルスタッフ	

3. 活動の総括

令和元年度は 16 件の公開 FD/SD を開催し、合計 564 名（内訳：学内 150 名、学外 414 名）の参加を得た。各モジュールにおける活動は以下のようにまとめられる。

■ リベラルサイエンス教育開発モジュール

- 分野の垣根を越えたリベラルサイエンス科目の開発に関する研修会を 2 件実施した。
- 九州大学の初年次教育改革の記録を取りまとめた書籍『アクティブ・ラーナーを育む－新時代を拓く基幹教育－』（九州大学出版会）を出版した。
- リベラルサイエンス教育開発に関する勉強会を 2 件実施した。

■ 大学教職員職能開発モジュール

- 「九州大学アクティブラーニング教室」として、アクティブラーニング手法に関する研修会を 5 件実施した。
- 合理的配慮に関する研修会を 1 件実施した。
- その他、準正課活動と理系研究室マネジメントに関する研修会を、それぞれ 1 件ずつ実施した。

■ 専門的職員養成モジュール

◇ カリキュラム設計担当者養成プログラム

- 「カリキュラム設計担当者養成プログラム」（初級・上級各 1 件）を実施した。

◇ アドミッション・オフィサー養成プログラム

- 大学入試センターと協力し、アドミッションリーダー研修「入試問題の作成と評価」を実施した。
- 大学コンソーシアム京都との共催により、第 17 回高大連携教育フォーラム特別分科会①「アドミッション専門人材の育成」を実施した。

◇ インスティテューショナル・リサーチャー養成プログラム

- 「IR 初級人材育成研修会」および「継続的改善のための IR/IE セミナー」を実施した（後援：大学評価コンソーシアム）。

■ その他

- 拠点運営委員会を 2 回開催し、実施計画とその詳細および実績に関し意見交換を行った。
- 拠点活動の広報のためのウェブサイトをリニューアルした。
- 研修効果検証のためのウェブアンケートを実施した。
- 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）感染拡大を考慮し、令和 2 年 2 月・3 月に開催予定だった 5 件の研修会を延期した。これらの研修会等については、令和 2 年度以降に開催する予定である。

4. FD/SD 開催実績

令和元年度に開催された FD/SD への参加者内訳を表 1 に示す。

表 1：共同利用状況

	機関数	利用人数 (実数)	利用人数 (延べ)
学内 (法人内) ³	32	84	150
国立大学	27	47	57
公立大学	15	19	25
私立大学	111	212	260
大学共同利用機関法人	1	2	2
民間・独立行政法人等	16	24	29
外国の研究機関	1	1	1
県立高校	11	16	24
市立高校	3	5	5
私立高校	2	2	5
高等専門学校	2	4	6
(うち大学院生)	(3)	(17)	(20)
合計 ⁴	221	416	564

- 学外参加者においては、特に私立大学から非常に多くの参加を集めた。その内の大部分は専門的職員養成モジュール FD/SD への参加者であった。この傾向は昨年度と同様である。
- また、高校教員の参加が一定数あることも本拠点の特徴の一つとして挙げられる。

³ 学内の場合、機関数には部局数を掲載している。

⁴ 九州大学は機関数「1」で計上している。

表 2：学外参加者の地域属性（延べ人数）

		参加者の所属内訳				
地域	地域別合計	国立大学	公立大学	私立大学	高校	その他
北海道	7	4	0	3	0	0
東北	16	8	2	6	0	0
関東	59	3	0	44	0	12
中部	22	1	2	16	2	1
近畿	81	13	3	52	8	5
中国・四国	18	5	6	6	0	1
九州・沖縄	210	23	12	133	24	18
海外	1	0	1	0	0	0
合計	414	57	26	260	34	37

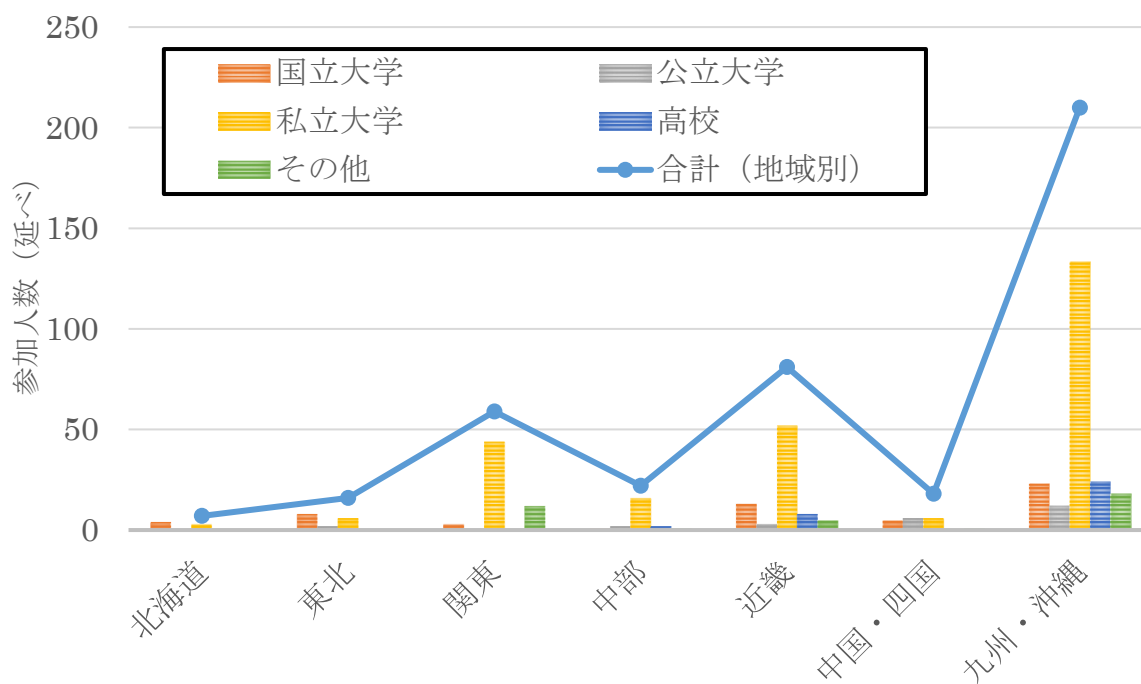


図 1：学外参加者の地域属性（表 2 参照）

表 3：学外参加機関の地域属性

地域	機関数	参加機関の内訳				
		国立大学	公立大学	私立大学	高校	その他
北海道	5	3	0	2	0	0
東北	8	2	2	4	0	0
関東	33	2	0	26	0	5
中部	16	1	2	11	1	1
近畿	47	8	2	27	6	4
中国・四国	12	3	3	5	0	1
九州・沖縄	67	8	6	36	9	8
海外	1	0	1	0	0	0
合計	189	27	16	111	16	19

表 4：学内参加者の職種・職位（延べ人数）

職種・職位	人数
教授	13
准教授	33
講師	9
助教	13
学術研究員	19
職員	37
大学院生・学部生	22
その他・未記入	4

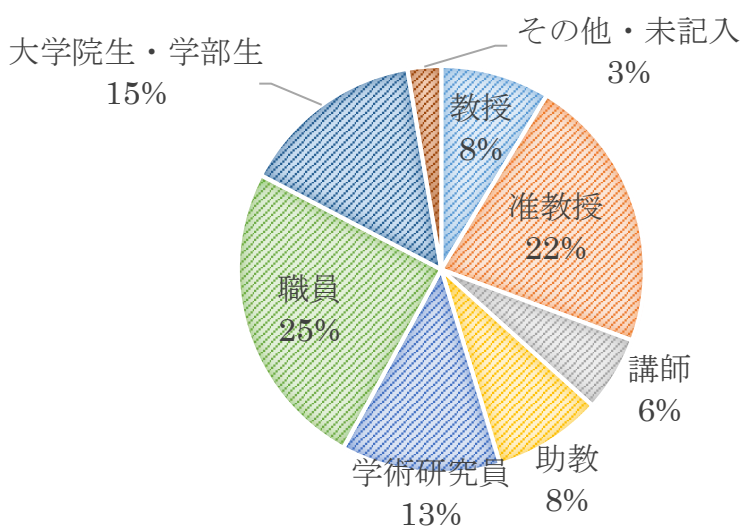


表 5：学外参加者の職種・職位（その他・未記入を除く延べ人数）

職種・職位	人数
教授	50
准教授	45
講師	14
助教	8
大学職員	204
大学院生	2
高校教員	34
高専教員	6

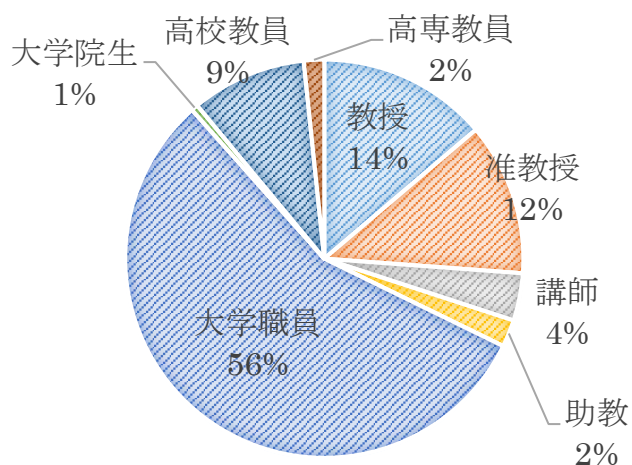
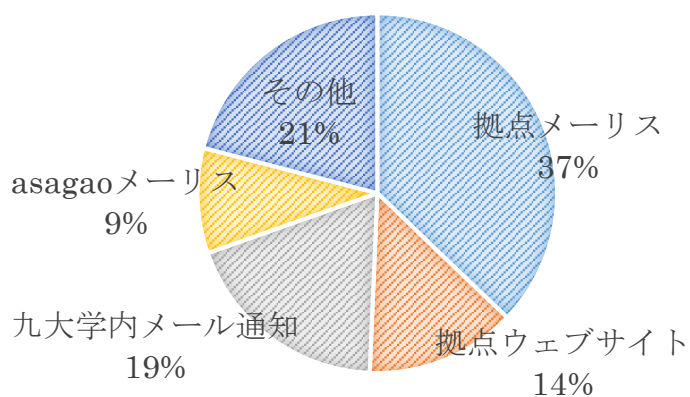


表 6 : 講師の所属内訳 (延べ人数)

所属	人数
学内 (基幹教育院)	4
学内 (他部局)	7
学外	24

表 7 : 情報源の内訳 (本研修会については、何でお知りになりましたか。)

情報源	回答数
拠点メーリス	55
拠点ウェブサイト	20
九大学内メール通知	28
asagao メーリス	14
その他	31

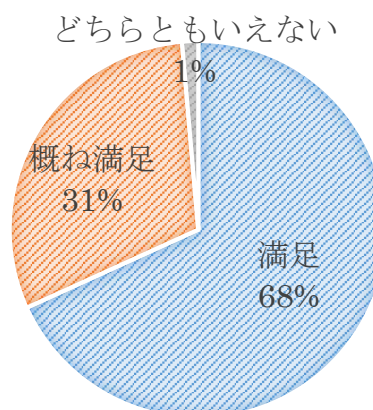


その他の例 :

「ポスター (センター3 号館 1F)」「昨年度参加した別の職員から聞いた」「関係者からの紹介」「学内の教員からの紹介」「同僚からの紹介」など。

表 8 : 参加者の満足度

満足度	回答数
満足	148
概ね満足	66
どちらともいえない	3
やや不満足	0
不満足	0



5. FD/SD 開催報告

令和年度に本拠点が開催した FD/SD (表 9) の開催報告を示す⁵。各開催報告には、FD/SD 終了時に行った参加者アンケートの結果に対する講師からの回答・コメント、令和 2 年 5 月に行ったアンケートの結果も掲載してある。

表 9：令和元年度に開催した FD/SD の一覧とその開催報告掲載ページ

No.	FD/SD 名称	掲載ページ
1	大学入試センター・アドミッションリーダー研修「入試問題の作成と評価」 【協カイベント】	
2	リベラルサイエンス教育開発 FD 「科学の見方・考え方を養う教材開発の経験と勘」	p12-p14
3	カリキュラム設計担当者養成プログラム（基礎編） 「学修成果に基づく教学マネジメントに向けて」	P15-p18
4	学生支援セミナー「九州大学における合理的配慮の実態」	p19-p21
5	九州大学アクティブラーニング教室 「ピア・インストラクションによるグループ学習」	p22-p24
6	九州大学アクティブラーニング教室 「アクティブラーニングを可能にする協同学習」	p25-p27
7	九州大学アクティブラーニング教室「プレゼンテーション教育を考える」	p28-p30
8	九州大学アクティブラーニング教室「ディベート入門講座」	p31-p32
9	カリキュラム設計担当者養成プログラム（上級編） 「学習成果を可視化するーカリキュラムと評価の両面からー」	p33-p36
10	第 3 回アドミッションスペシャリスト能力開発研修会（京都会場） 特別分科会 1「アドミッション専門人材開発」【共催イベント】	
11	九州大学アクティブラーニング教室「テクニカルプレゼンテーション」	p37-p39
12	IR 初級人材育成研修会	p40-p41
13	継続的改善のための IR/IE セミナー	p42-p43
14	カリキュラムを補完する準正課活動の設計に関する FD	p44-p46
15	大学院理系研究室のマネジメントー風通しの良い研究室の構築に向けてー	p47-p49
16	リベラルサイエンス教育開発 FD 「科学の考え方を育てる授業開発ワークショップ」	p50-p52

次頁以降に掲載する開催報告の内容は、以下 URL にも掲載してある。

https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/activities_prev/

⁵ 開催報告は本拠点が主催したもののみを掲載する。

リベラルサイエンス教育開発 FD「科学の見方・考え方を養う教材開発の経験と勘」

令和元年5月27日(月)にリベラルサイエンス教育開発FD「科学の見方・考え方を養う教材開発の経験と勘」を開催しました。今回のFDでは、NHKEテレ『考えるカラス』や『カガクノミカタ』の企画・制作、そして、それらと連動させた親子向けワークショップなどの「科学の見方・考え方」に焦点を当てた教材および教育プログラム開発に携わってきた加納圭先生をお招きしました。FDの前半は、加納先生のこれまでの経験を講演して頂き、その後には、講演内容を基に科学の考え方を養うための教材や科目開発について、質疑応答とディスカッションを行いました。

開催概要

【日時】令和元年5月27日(月) 14:50~16:50

【会場】九州大学 伊都キャンパス
センター3号館 3105・3106 教室

【定員】30名(先着順)

【参加費】無料

【対象】

科学教育や科目開発にご関心のある大学教員、
高校教員、学生

【講師】加納圭(滋賀大学教育学部・准教授)

【プログラム】

14:50~15:40 加納先生講演(経験を交えた事例紹介)

15:40~16:20 質疑応答・ディスカッション

16:20~16:25 休憩

16:25~16:50 希望者でさらなる質疑応答・ディスカッション

リベラルサイエンス教育開発FD
**科学の見方・考え方を
養う教材開発の経験と勘**

定員 30名
参加費 無料

2019年 5月27日(月) 九州大学 伊都キャンパス
センター3号館3105・3106教室

<https://www.kyushu-u.ac.jp/f/24239/20191001to.pdf> ※MAPのGIの建物です。

【対象】 科学教育や科目開発にご関心のある大学教員、高校教員、学生

プログラム	時間	内容
	14:50~15:40	講演(経験を交えた事例紹介)
	15:40~16:20	質疑応答・ディスカッション
	16:20~16:25	休憩
	16:25~16:50	希望者でさらなる質疑応答・ディスカッション

講師 加納 圭 (滋賀大学 教育学部・准教授)
専門は科学コミュニケーション。
NHK Eテレ『考えるカラス』『カガクノミカタ』の企画・制作
にも関わっている。

【申込方法】
下記アドレスor QRコードよりお申込みください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfd/e/form/#form20190527>
※ 5/24(金) 17:00締切
但し定員に達しましたら受付を締め切る場合がございますので、ご了承ください。

お問合せ先
九州大学 芸術教育院
次世代型大学教育開発センター
TEL: 092-802-6070
Mail: kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp

拠点イベントの
お知らせについて
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfd/e/>

その他拠点のイベントを掲載しております。
詳しくはHPをご覧ください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfd/e/>

開催報告

【参加者情報】

学外：6名（うち県外 2名）

学内：17名

合計：23名



《参考になった点》（抜粋）

- 徹底して答えを教えない姿勢が興味深かった。
- 全てを答えなしにするのは難しいが、ワークショップの具体例など大変参考になった。
- 答えを言わないというコンセプトに共感した。つい答えを教えてしまう自分に反省している。
- 担当する授業（教養系）の改善、教養科目カリキュラムの見直し、一般向けワークショップの再デザインなど多数の点で参考になった。
- About science という「科学についての知識」を学ぶことの大切さに気付くことができた。
- 科学の知識だけでなく、「科学についての知識」も養うため、生徒が答えを知らないような課題設定を意識する。

《分からなかった点・もっと説明してほしい点》（抜粋）

- 答えのない実験で湧いた学生の「なぜ？」のモチベーションを、学生にとって退屈になりがちな専門の基礎知識を伝えるタイプの授業にいかにつなげるか工夫があれば教えてもらいたい。

【加納先生からの回答】なぜ？のモチベーションを維持させられれば、基礎知識は学生が主体的に獲得していくのが理想ではないかと思いました。

- 小学生を対象とする時と高校生や大人を対象とする時では、やり方を変えていると思うが、それぞれで気を付けている点があれば教えてほしい。

【加納先生からの回答】実は、あまりやり方を変えていません。大人も子どもも「科学をする」という行為はあまり変わらないからかもしれません。

《その他（抜粋）》

- 専門科目の授業に生かせるアイデアを期待していたが、それが得られなかったのは残念だった。

【事務局からのコメント】ご期待に沿えず申し訳ございませんでした。今回のFDで紹介された話題は、主に小中高生対象に行われた事例でした。ご指摘の通り、今後はもう少し専門性を持った学生向けの事例を取り上げてみるのも面白いかもしれません。今後の検討材料にさせていただきます。

《FD/SD での学びの活用について》（令和 2 年 5 月アンケート結果より抜粋）

- 新しい教養演習のシラバスに内容を反映させた。
- 研修会で紹介された実験を自分なりに発展させた。

カリキュラム設計担当者養成プログラム（基礎編） 「学修成果に基づく教学マネジメントに向けて」

令和元年7月19日（金）にカリキュラム設計担当者養成プログラム（基礎編）「学修成果に基づく教学マネジメントに向けて」を開催しました。本プログラムでは、「学修成果に基づく学生本位の教育を展開するためには、大学教育をどのように設計・実施・評価・改善すればよいのか」、「いかなる教学マネジメントの仕組みを構築すればよいのか」といった課題について、「基礎編」「上級編」「実践編」の3回に渡って扱う予定です。今回の「基礎編」では、比較教育学、高等教育論、教育課程論の観点から、学修成果に基づく大学教育をデザインするための基礎的な考え方、及びそれを推進する教学マネジメントの在り方について紹介しました。

開催概要

【日時】 令和元年7月19日（金）14:00～16:00

【会場】 JR博多シティ 9F 会議室（1）

【定員】 70名（先着順）

【参加費】 無料

【対象】

学修成果に基づく大学教育に関心のある大学教職員、
大学院生

【講師】 深堀聰子

（九州大学 教育改革推進本部・教授）

【プログラム内容】

1. 学修成果に基づく学位プログラムの設計・実施・評価・改善の方法
2. 認証評価第3サイクルにおける3つのポリシーと内部質保証
3. 学修成果に基づく教学マネジメントの取組事例

主催：九州大学基幹教育院次世代型大学教育開発センター（文部科学省教育関係共同利用拠点事業）

-カリキュラム設計担当者養成プログラム-
（基礎編）

学修成果に基づく
教学マネジメントに向けて

先着 70名 参加費 無料

2019年7月19日（金）14:00-16:00

JR博多シティ9階会議室1（福岡市博多区博多駅中央街1-1）
<https://www.jrhakatacity.com/communicationspace/#Access>

【対象】 学修成果に基づく大学教育に関心のある大学教職員、大学院生

プログラム

1. 学修成果に基づく学位プログラムの設計・実施・評価・改善の方法
2. 認証評価第3サイクルにおける3つのポリシーと内部質保証
3. 学修成果に基づく教学マネジメントの取組事例

【講師】
深堀聰子（九州大学 教育改革推進本部・教授）

【申込方法】
下記アドレスor QRコードよりお申込みください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/form/#form20190719>
※ 7/15（月）17：00締切
但し定員に達しましたら受付を終了いたしますので、ご了承ください。

お問合せ先
九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
TEL：092-802-6070
Mail：kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp

振込イベントのお知らせについて
その他拠点のイベントを掲載しております。
詳しくはHPをご覧ください。
<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/>



開催報告

【参加者情報】

学外：65名（うち県外 45名）

学内：4名

合計：69名



《参考になった点》（抜粋）

- 学位プログラムの学修成果と授業科目の学習成果の関係と教学マネジメントはとても参考になった。
- 学位プログラムの詳細から、学位プログラムと教育課程の考え方の違いなど、用語解説から行って頂いたことがとても助かった。参考例を出しつつ参考例にないものまで解説があり幅広い説明が自分に当てはめやすく参考になった。
- 「学位プログラム」「学位プログラムの学修成果」「学位プログラムの学修成果を達成しているか」といったことに意識を喚起するための仕組みや企画を立案・実施することが必要であることについて、改めて認識できた。
- 学位プログラムをはじめとした概念について正しい知識を修得できた。それに伴い、既存の学部学科組織を基準としたDP（ディプロマポリシー）の作成がなぜ抽象的になるか良く分かった。自組織にあるDPの見直しを早急にすべきと痛感した。
- 学位プログラムの考え方を再度確認できたのは良かった。どこの大学も時間をかけて行っているのだと分かり、これからも何度も説明していこうと思うことができ。その説明を進めるための根拠を頂けて、とてもためになった。

《分からなかった点・もっと説明してほしい点》（抜粋）

- 学位プログラムには、通常の教育課程の授業科目の学習成果以外の正課外活動も含まれるのか。
【深堀先生からの回答】 育成する人材像に鑑み、不可欠な要素は、学位プログラムに含まれるべきだと考えます。その一方で、学位プログラムの学修成果は達成可能で測定可能である必要があります。その意味で、学位プログラムに不可欠の要素は正課として位置付け、単位を付与して、成績評価を行っていく考え方をする必要があるのではないのでしょうか。
- 「学位プログラムの学修成果」説明の際に、「直接測定は（あまり）想定されていない（が考える必要あり）」とコメントをされていたように思う。直接測定はしないが間接的には評価が必要、という意味か？あるいはプログラム修了の根拠となるように徐々に直接測定が求められる、ということなのか。

【深堀先生からの回答】 従来の学位プログラムの考え方では、学修成果の達成に適した授業科目を

配置した上で、成績評価と単位認定に基づいて、学位を授与するという考え方がとられてきました。その意味で、個別の学修成果を直接測定することは想定されてきませんでした。しなしながら、学修成果の達成度をより直接的に確認することなく、教学マネジメントを展開することは難しいため、学修成果を直接測定するための様々な工夫が行われるようになってきています。アンケート等による間接評価も、テストやパフォーマンス評価等による直接評価に並ぶ方法の一つです。

- 卒業要件外となっている教職科目等の取り扱いについて、アドバイスを頂きたい。

【深堀先生からの回答】 教職課程には明確な育成する人材像がありますし、授業科目のウェイトも決して軽くありません。その意味で、教職科目を含まないプログラムと、教職科目も含むプログラムを別立てで設定する考え方ができると思います。

- 本学では PDCA サイクルがカリキュラムだけ、授業評価だけと単独で行われていて、全学では回っていない状態。学生数が 1500 人に満たない規模の大学なので全学での教学マネジメントは可能だと思うが、1つ1つの取り組みをどうすれば繋げていくことができるのかを知りたい。

【深堀先生からの回答】 あれもこれも手がけ、多大な労力を費やししながら、実質的な改善につなげられない状態が長引くと、徒労感が募り、士気が低下し、組織としての取組を持続できなくなります。どのような課題があり、どのような改善を導きたいのか、そのためにはどのような情報が必要なのか、何に優先的に取り組むべきなのかという逆向き設計の考え方で、スリムな教学マネジメントの仕組みを設計していく考え方が重要だと考えます。

- ポリシーと授業科目との関係性の共通認識を非常勤講師にも理解してもらう必要があると思うが、非常勤講師にも理解してもらうにはどのような方法（説明）が有効かを教えてほしい。

【深堀先生からの回答】 非常勤講師を含む教員団が学位プログラムに関する研修会を実施することが理想的だと思います。実質的には難しいため、カリキュラム・マップ（コース・ツリー）などを用いて、学位プログラムにおける授業科目の役割を分かりやすく説明していく工夫が重要だと考えます。そうした分かりやすい資料は、学生にとっても有用であるはずですが。

- 学修成果の達成度を捉える仕組みの構築（内部質保証）の部分において、学修成果（いわゆる DP）の部分は、高大接続改革で示されている学力の3要素との関係はあるのか。

【深堀先生からの回答】 DP を達成するためには、カリキュラムを整えるだけでは限界があます。既修科目を通して習得した知識や能力、興味関心等にも規定されます。その意味で、学生が高校までの教育を通してどのような知識や能力、どのような学びへの姿勢を身に付けてくることを期待するかを表す AP（アドミッションポリシー）と無関係ではありません。

- 2040 年グランドデザインの解釈を知りたい。

【深堀先生からの回答】 政策の解説をすることが本拠点の役割ではありませんが、グランドデザイン答申のポイントは、本プログラムで焦点化している「学修者本位の教育」「全学的な教学マネジメントの確立」「学修成果の可視化」です。

- 参照基準の狙いは、自律性や多様性も尊重しながら等価性を高めていくことにあると思うのだが、同軸上で高評価を目指すという画一化や標準化へ繋がってしまう可能性もあると危惧している。この

点について、国内外含めこれまでに議論や合意の蓄積はあるか。

【深堀先生からの回答】 現在、教育学分野の参照基準をまとめており、その「参考資料」に英国における参照基準の活用のあり方を解説しています。間もなく公表いたしますので、そちらをご覧ください。

《その他》(抜粋)

- グループに分けて、その中で名刺交換や情報交換の場があってもよいのではないかと思った。

【事務局からのコメント】 ご提案ありがとうございます。同様の要望も頂いております。次回以降は、グループワークの導入も検討しております。

《FD/SDでの学びの活用について》(令和2年5月アンケート結果より抜粋)

- まったくわからない状況での参加だったので、具体的な活用というよりは、関係のある文書等を読みやすく(理解しやすく)なったことが挙げられる。
- 自分で学ぶための方向性を確認できた。
- 自大学の様々な取り組みを、学修成果の可視化という観点から考えることができている。
- 新カリキュラムのマップ作成の考え方に、直接的ではないが役立っているかもしれない。
- カリキュラム編成、DPなどのポリシー検討、授業科目の見直しの参考資料としている。
- 検討や設計に着手する時間・人的資源がないため、活用できていない。

学生支援セミナー「九州大学における合理的配慮の実態」

令和元年7月25日(木)に学生支援セミナー「九州大学における合理的配慮の取り組み」を開催しました。今回の学生支援セミナーでは、障害を持った学生への修学支援に携わっている横田晋務先生に、合理的配慮の基礎知識や九州大学における取り組み、障害の状態像とそれに対する配慮の例について、グループワークを交えながら説明して頂きました。後半の総合討論では、横田先生に加え、合理的配慮に関する学生と教員の対話をコーディネートされていた川口さんも交え、現場レベルでの工夫などについて議論を深めました。

開催概要

【日時】 令和元年7月25日(木) 14:50~16:50

【会場】 九州大学 伊都キャンパス
センター3号館1階 3105・3106教室

【定員】 30名(先着順)

【参

加費】 無料

【対象】

大学における障害者支援や合理的配慮に関心のある教職員

主催：九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
(文部科学省教育関係共同利用拠点事業)

学生支援セミナー 九州大学における 合理的配慮の取り組み

先着
30名
参加費
無料

2019年 7月25日(木) 九州大学 伊都キャンパス
センター3号館3105・3106教室

http://www.kyushu-u.ac.jp/6/35782/2019to_2.pdf ※MAPD61書の建物です。

【対象】大学における障がい者支援や合理的配慮に関心のある教職員

プログラム	時間	内容
	14:50~15:30	講演(横田)
	15:30~16:20	合理的配慮事例紹介・質疑応答・ディスカッション(横田・川口)
	16:20~16:25	休憩
	16:25~16:50	希望者でさらなる質疑応答・ディスカッション

【講師】 横田 晋務
(九州大学 基幹教育院/キャンパスライフ・健康支援センター 准教授)
川口 智也
(九州大学 キャンパスライフ・健康支援センター テクニカルスタッフ)

【申込方法】
下記アドレスorQRコードよりお申込みください。
<http://www.artscl.kyushu-u.ac.jp/~cfd/e/form/#form20190725>
※7/22(日)17:00締切
但し定員に達しましたら受付を締め切りますので、ご了承ください。

お問合せ先
基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
TEL: 092-602-6070
Mail: kiyetan@artscl.kyushu-u.ac.jp

拠点イベントの
お知らせについて
その他拠点のイベントを掲載しております。
詳しくはHPをご覧ください。
<http://www.artscl.kyushu-u.ac.jp/~cfd/e/>

【講師】

横田晋務 (九州大学 基幹教育院/キャンパスライフ・健康支援センター 准教授)

川口智也 (九州大学 キャンパスライフ・健康支援センター テクニカルスタッフ)

【プログラム】

14:50~15:30 講演・グループワーク (横田晋務)

15:30~16:20 合理的配慮事例紹介・質疑応答・ディスカッション (横田晋務・川口智也)

16:20~16:25 休憩

16:25~16:50 希望者でさらなる質疑応答・ディスカッション

開催報告

【参加者情報】

学外：8名（うち県外 3名）

学内：16名

合計：24



《参考になった点》（抜粋）

- 全体的に参考になった。具体的で分かり易かった。
- 合理的配慮の基本的な考え方を知れた。そのことにより合理的配慮の対応がしやすくなると思う。
- 九州大学内のサポート（組織や支援ステップなど）がどのようになっているのか分かったので、ぜひ利用したいと思った。
- 合理的配慮や支援について協議する組織づくりは必要だと思った。

《分からなかった点・もっと説明してほしい点》（抜粋）

- 生まれつきではなく環境の変化による精神の変化にも触れて欲しかった。

【横田先生からの回答】コメントいただきありがとうございます。今回は、時間の都合上、発達障害に焦点を当て、お話しさせていただきましたが、精神の変化(精神障害)は、高等教育機関の在籍学生も増えており、学生本人のみならず、大学全体の障害学生支援を考える上でも非常に重要であると考えられます。具体的な支援策としましては、ルール・慣行の柔軟な変更に関する支援が中心的となりますが、状態が可変的であるため、きめ細やかな対応が必要となると思われまます。

【川口さんからの回答】コメントいただきありがとうございます。障害種にかかわらず、配慮を申請している全学生に対して、配慮が十分に実施されているか、配慮が学生の状況に合っているか、定期的なモニタリングをおこなっております。とりわけ精神障害のある学生については、状態が変化しやすいと考えられるため、モニタリングをより綿密におこなうことがあります。

- 建設的対話のためのグループワークの際に、支援側のスタッフの関わるタイミングも記入するともっと分かり易いと思った。

【横田先生からの回答】コメントいただきありがとうございます。本学では、学生との相談、部局内での検討、および建設的対話の全ての段階で、キャンパスライフ・健康支援センター インクルージョン支援推進室が相談に応じることができる体制としております。今回のグループワークのように、建設的対話に向けて、授業内容と配慮内容との関連を考える際に、ご不明な点がある場合には、授業担当者からの相談をお受けすることが可能です。

【川口さんからの回答】コメントいただきありがとうございます。建設的対話が終わった後であっても、実際に授業が進むなかで困難が生じるなどして、問い合わせいただくこともあります。

- 部局間の対応や手続きの違いについて知りたかった。

【横田先生からの回答】 各部局における合理的配慮の手続きの流れは九州大学の学内限定 HP に記載されていますので、ご確認いただければ幸いです。

《その他》(抜粋)

- もっと他の教員も参加すべきだと思った。特に今日の内容はどの授業担当者でも役に立つ内容だったので。興味があって参加する教職員はもともと意識も高いと思うが、実際に受講すべきは無関心な教職員なのかもしれない。

【事務局からのコメント】 コメントありがとうございます。より多くの教職員に本センターの活動に参加して頂けるよう、今後も広報活動に力を入れていきたいと思えます。

- 予定変更(グループワークが入れられたこと)を知らせて頂き、助かった。事前に知らせて頂いて心の準備ができた。

【事務局からのコメント】 今回は募集開始後に当日プログラムの変更があり、ご迷惑をお掛けしました。今後は、事前にグループワークの有無についても明記するように気を付けます。

《FD/SDでの学びの活用について》(令和2年5月アンケート結果より抜粋)

- シラバスに様々なサポートの連絡先などを掲載しており、初回授業で必ず説明をするようにしている。一般的なディサビリティの 카테고리には入らなくても様々な学生がおり、学習スタイルなどが異なるということをいつも念頭に置いて授業を組み立てている。
- 自分の授業ではまだ配慮を必要とする学生は出ていないが、私は配慮依頼文の翻訳作業に関わっているので、そこで研修会で得た知識が少し役に立っていると感じる。

九州大学アクティブラーニング教室 「ピア・インストラクションによるグループ学習」

令和元年8月23日(金)に九州大学アクティブラーニング教室「ピア・インストラクションによるグループ学習」を開催しました。今回のアクティブラーニング教室では、物理教育のために開発され、近年では多様な教育現場でも用いられるようになってきているピア・インストラクション(PI)を取り上げました。前半は、典型的なPIの流れや、PIを実施する際に注意すべきポイントなどについて、小島健太郎先生に解説して頂きました。後半には、参加者それぞれが担当する授業を想定してPI導入の可能性を具体的に検討し、意見交換を行いました。

開催概要

【日時】 令和元年8月23日(金) 15:30~17:30

【会場】 九州大学 伊都キャンパス
センター1号館4階1409教室

【定員】 40名(先着順)

【参加費】 無料

【対象】 ピア・インストラクションに関心のある大学教員、
高校教員、大学院生

【講師】 小島健太郎(九州大学 基幹教育院・准教授)

【プログラム】

15:30~16:30 講演とピア・インストラクションの体験

16:30~16:40 休憩

16:40~17:30 ピア・インストラクションの活用を検討するワークショップ

主催：九州大学 基幹教育院次世代型大学教育開発センター(文部科学省教育関係共同利用施設事業)

九州大学アクティブラーニング教室
ピア・インストラクション
によるグループ学習

先着
40名
無料

2019年8月23日(金) 九州大学 伊都キャンパス
センター1号館1409教室

http://www.kyushu-u.ac.jp/4/35782/2019to_2.pdf ※MAPの59番の建物です。

【対象】ピア・インストラクションに関心のある大学教員、高校教員、大学院生

プログラム	15:30~16:30	16:30~16:40	16:40~17:30
	講演とピア・インストラクションの体験	休憩	ピア・インストラクションの活用を検討するワークショップ

【講師】

小島健太郎(九州大学 基幹教育院・准教授)

【申込方法】
下記アドレスor QRコードよりお申込みください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfdte/form/#form20190823>
※8/19(月)17:00締切
但し定員に達しましたら受付を締め切る場合がございますので、ご了承ください。

お問合せ先
九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
TEL: 092-802-6070
Mail: kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp

拠点イベント
その他拠点のイベントを掲載しております。
詳しくはHPをご覧ください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfdte/>

開催報告

【参加者情報】

学外：8名(うち県外1名)

学内：14名

合計：22名



《参考になった点》(抜粋)

- ピア・インストラクションの手法を初めて知ったので、授業の導入として取り入れたい。
- ピア・インストラクションの講義を設計する上でのコツが分かった。また、小島先生の実験の経験を共有して頂いたのも非常に役に立った。
- 問題の設定の仕方や、ピア・インストラクションを取り入れた授業での学生の雰囲気、クリッカーほか機器の活かし方など、具体的な様子が良く分かり参考になった。
- ワークシートを利用して、自分の考えを文章や図式化により議論を活発化するところが参考になった。
- 物理を教えているので、コンセプテストが勉強になった。また、その作り方を学べたのは有益だった。

《分からなかった点・もっと説明してほしい点》(抜粋)

- 授業の部分の展開例や予習用の動画についての情報も知りたかった。
【小島先生からの回答】 詳しいご説明ができず、申し訳ありませんでした。予習用の動画は、映像はパワーポイントのスライドで、音声にナレーションが入った程度の簡単なものを利用しています。反転学習については、また別の機会にご紹介する場を企画できればと考えております。
- 解答の示し方やその後の解説の仕方について教えてほしい。
【小島先生からの回答】 私がピア・インストラクションを授業で実施する際、プレ・ポストの回答の正答率に応じて、回答の示し方や解説の仕方を変えています。例えば、プレの正答率が 80%を超える場合などは、その場で正解を示し簡単な解説を行い、議論やポスト回答をスキップして、次の問題に進めます。また、ポストの正答率があまり高くない場合は、正解と解説を示したのち、理解できたかをクリッカーで回答させる、ということを行ったりします。
- ピア・インストラクションは、その発祥から見ても自然科学系の授業に有効であるように思った。他方で、いわゆる文系の授業の場合、共有すべき概念的理解や、「正解」とすべき事柄を設定しにくいようにも感じ、直接そのまま取り入れるのは難しいようにも感じた。しかし、誤った理解を意識化するプロセスなど、工夫次第で応用できる要素は多いとも思うので、活用していきたい。
【小島先生からの回答】 今回は物理学での事例をもとにピア・インストラクションをご紹介しました。ご指摘頂いたように、科目や授業によっては、今回ご紹介したやり方をそのままは活用しにくい場合もあると思います。ピア・インストラクションの基本的な考え方をもとに、授業に適したやり方を開発・実践していくのが良いのではないかと思います。
- 物理学以外の問題例があればご紹介頂ければと思いました。例えば、ピア・インストラクションの手法を用いた物理学以外の九州大学での授業はあるのでしょうか。
【小島先生からの回答】 申し訳ありませんが、九州大学での他の事例は、私は把握しておりません。問題例はすぐにはご紹介できませんが、参考文献としてご紹介した論文 “Research-Based

Implementation of Peer Instruction: A Literature Review” の補助資料 (supplemental material) で多様な分野の事例が収集されているため、ご参考になるかもしれません。

- ピア・インストラクションがいわゆるアクティブラーニング型の授業手法としてどのような位置づけなのか、ご教示頂きたかった。例えば、ピア・インストラクションは物理学における誤概念の理解をどう高めるかという問題意識に対応する形で開発された経緯があるとのことだったが、そもそも授業実践における学習効果の阻害要因として誤概念理解という課題のほかにもどのような課題が問題となっているのか、それに対してどのような教授法が提案されているのか、というようにインストラクショナルデザインに関する背景知識があれば、数ある教授法の中でピア・インストラクションがどのような特質をもった手法なのかをつかむことができ、今回の参加者の学習効果もより向上するのではないかと思った。

【小島先生からの回答】 ご指摘ありがとうございます。今後の FD の内容を検討する際の参考にさせていただきます。なお、不十分かもしれませんが、いくつかコメントを付け加えさせていただきます。アクティブラーニング手法としてのピア・インストラクションの特徴は、大人数の講義で取り入れやすい点が挙げられます。また、ピア・インストラクション（およびその応用）の利用範囲は広く、さまざまな目的で利用することができます。例えば、概念理解を狙うのではなく、授業への参加意識や学習の動機付けを高めるために使うことも可能です。

- もう少し問いづくりのワークショップをしたかった。

【小島先生からの回答】 ワークショップの時間が不足し、申し訳ありませんでした。また機会がありましたら、問いづくりのワークショップを中心にした FD なども企画させて頂ければと考えています。

《その他》(抜粋)

- クリッカーの貸し出しはして頂けるのでしょうか。

【事務局からの回答】 ご質問ありがとうございます。学内の方には、情報相談室（センター1号館4階）から貸し出し可能です。また、小島先生からも紹介がありましたが、九州大学 Moodle 上にもクリッカー機能がございますので、ご活用下さい。

- 可能であれば、土曜の午後に開催されると参加し易いです。

【事務局からの回答】 ご要望ありがとうございます。平日開催の希望もあり、最近では平日開催をしております。土曜開催の希望が今後も増えるようであれば、土曜開催も検討したいと思います。

- 2回目の受講ですが、毎回参加者の所属が様々で、とても勉強になる。

【事務局からの回答】 コメントありがとうございます。大学教職員だけでなく、大学院生や高校教員などの多様な方々が参加して頂いているのが本センターの FD の特徴の一つです。多様な方々に開かれた場を今後も企画していきたいと思っております。

《FD/SD での学びの活用について》(令和2年5月アンケート結果より抜粋)

- 校内の研修会で報告し、共有させて頂いている。

九州大学アクティブラーニング教室「アクティブラーニングを可能にする協同学習」

令和元年9月13日（金）に九州大学アクティブラーニング教室「アクティブラーニングを可能にする協同学習」を開催しました。今回のアクティブラーニング教室では、協同学習（学生が自らの学びと仲間の学びを最大限にするために共に学び合うグループを用いた学習法）について取り上げました。久留米大学の太田啓介先生をお招きし、実践や体験を元に、協同学習スキルについて、グループワークを交えながら解説して頂きました。

開催概要

【日時】 令和元年9月13日（金）15:30～17:30

【会場】 九州大学 伊都キャンパス
センター1号館1409教室

【定員】 40名（先着順）

【参加費】 無料

【対象】

協同学習に興味のある方ならばどなたでも参加できます。

【講師】 太田啓介

（久留米大学 医学部 先端イメージング研究センター・教授）

【プログラム】

15:00～ 受付開始

15:30～16:30 解説「協同学習とは」

16:30～17:30 グループワーク・全体討論

主催：九州大学基幹教育院・次世代型大学教育開発センター（文部科学省教育関係共同利用拠点事業）

九州大学アクティブラーニング教室

アクティブラーニングを可能にする協同学習

2019年9月13日（金）

九州大学 伊都キャンパス センター1号館1409教室
http://www.kyushu-u.ac.jp/f/35782/2019to_2.pdf ※MAPの59番の建物です。

【対象】協同学習に興味のある方ならばどなたでも参加できます

プログラム	15:00～	15:30～16:30	16:30～17:30
	受付開始	解説「協同学習とは」	グループワーク・全体討論

※プログラムは変更する場合があります。

【講師】 太田 啓介（久留米大学 医学部 先端イメージング研究センター・教授）

先着 40名 参加費 無料

【申込方法】
下記アドレスor QRコードよりお申込みください。
<http://www.artsck.kyushu-u.ac.jp/~cfdde/form/#form20190913>
※9/9（月）17:00締切
但し定員に達しましたら受付を締め切る場合がございますので、ご了承ください。

お問合せ先 九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
TEL：092-802-6070
Mail：kyoten@artsck.kyushu-u.ac.jp

拠点イベントのお知らせについて <http://www.artsck.kyushu-u.ac.jp/~cfdde/>

その他拠点のイベントを掲載しております。詳しくはIPをご覧ください。

開催報告

【参加者情報】

学外：12名（うち県外4名）

学内：12名

合計：24名



《参考になった点》(抜粋)

- グループで議論を活発に行わせるにはルール作り(段取り)が重要であることが、実際に体験してみてもよく理解できた。

【太田先生からのコメント】ありがとうございます。

- 学生の積極的な授業への参加を促し、特に、分担して一つのセクションを受け持ち、お互いに報告し合うところが、協同の意味があって良かったと思う。

【太田先生からのコメント】学生達が楽しそうに話しているのを観るといつもうらやましくなります。でも、スタッフは入っちゃだめなんですよ。

- 学生実習や論文ゼミなどで協同学習の手法の一部を取り入れてみたいと思う。

【太田先生からのコメント】是非頑張ってください。

- これまでアクティブラーニング型の授業設計に取り組む際、いかに議論しやすい課題設定にするかばかりに気を使っていた。今後は協同の精神を培う環境づくりについても注意して授業設計を行いたい。

【太田先生からのコメント】太田も雰囲気がとても大切だと思うようになりました。自己弁護かもしれませんが、スタッフも、人それぞれ個性がありますので、型にとらわれずその人に合ったやり方で学生達と接するので良いのではないかと考えております。

- アクティブラーニングは、法学分野、医学分野では不可能に近いかとばかり思い込んでいた。しかし、少なくとも医学分野では可能かもしれないと思うようになった。

【太田先生からのコメント】ありがとうございます。

- やはり、学生に対しては分かりやすく的確な指示が必要なことが分かった。

【太田先生からのコメント】最初はそれで良いのですが、最終的には指示無しで動けるようになるのが目標です。

- 試行錯誤してより良いアクティブラーニングを模索していく過程を、事例を交えてお話し頂き、各過程における工夫・改善の意味や目的が理解し易かった。

【太田先生からのコメント】お恥ずかしい部分も多いのですが、参考になりましたら幸いです。

- 協同の精神の逆効果もあることについてはとても参考になった。

【太田先生からのコメント】逆効果と表現しましたが副産物が正しいかもしれません。方向性としては良い物ですが、知らない先生は驚かれるようです。

《分からなかった点・もっと説明してほしい点》(抜粋)

- 成績だけでなく、学生たちの授業に対する満足度が知りたかった。

【太田先生からの回答】そうですね。おおむね良好です。しかし、「時間の無駄だ」とか「意味が理解できない」など、中には厳しい意見もあります。この中で厳しい意見が出たらチャンスで、彼らの

成長につなげることができます。アンケートを頻繁に行うことで、このような意見をつかって、やり方を変更していくと、満足度は上昇傾向になります。

- 協同学習を暗記に生かす方法についてご教示頂けると有り難い。

【太田先生からの回答】 自己学習とその出力が協同学習を用いたモデルの基本ですので、我々は予習を重視する LTD 話し合い学習法を改変した手法をとっています。事前に学習すべきキーワードの入った課題シートを渡しておく、最低限は学んで来ると思います。しかし、残念ながら深い理解に至るのはまだまだ難しいところもありますので、更に予習の指導を考えなければならないと思っています。

- 今後、より良い授業運営を行うために、改善する必要があることは何か。

【太田先生からの回答】 予習の部分の改善と、フィードバック回数を増やすことが今年度の課題です。医学分野では一回の実習で学ぶべきことも多く、消化不良になりがちです。授業や予習は嫌いでも動画なら観てくれるかもしれないと考え、プチ講義を準備中です。

- LTD は理系科目でどのように使用可能か。

【太田先生からの回答】 自己学習とその出力が協同学習の基本になりますので、予習を重視すると様々な科目で利用できると思います。

- 発達障害学生のフォロー、成績の付け方。

【太田先生からの回答】 確実な手法はないと思いますが、状態に合わせて配慮はします。基本的には、相互の信頼関係が無いとうまくいきませんのでこの点を心がけています。また、実習など複数のスタッフがいる場合は、打ち合わせで共有することはしています。場合によって、提出物の提出が遅れがちになることが多いので早めに注意喚起を行いケアします。

《FD/SD での学びの活用について》(令和 2 年 5 月アンケート結果より抜粋)

- グループ活動の指導に参考にさせて頂いた。

九州大学アクティブラーニング教室「プレゼンテーション教育を考える」

令和元年10月11日（金）に九州大学アクティブラーニング教室「プレゼンテーション教育を考える」を開催しました。今回の九州大学アクティブラーニング教室は、九州大学におけるプレゼンテーション教育の実践例と共に、今後のプレゼンテーション教育について考える機会としました。実践例としては、学部1年生を主に対象とした講義「プレゼンテーション入門」および学部2年生以上と大学院生を対象とした講義「プレゼンテーション基礎」、そして、初年次学生からTA教育までの幅広いプレゼンテーション教育を実践している図書館TA（Cuter）の活動について、話題提供して頂きました。話題提供の後には、大学におけるプレゼンテーション教育についての全体討論を行いました。

開催概要

【日時】 令和元年10月11日（金）15:00～17:00

【会場】 九州大学 伊都キャンパス
中央図書館4階 きゅうと commons

【定員】 40名（先着順）

【参加費】 無料

【対象】 プレゼンテーション教育に関心のある大学教職員、高校教員、大学院生

【講師】

中野美香（福岡工業大学 社会環境学部・准教授）

上土井宏太（九州大学附属図書館 学術サポート課 学習・研究支援係）

【共催】 九州大学附属図書館

【プログラム】

15:00～15:35 話題提供1（中野美香）

「深い学びにつながるプレゼンテーション教育：並行反復学習法による九大生の変化」

15:35～16:10 話題提供2（上土井宏太）

「九州大学附属図書館におけるプレゼンテーション教育支援—図書館TA（Cuter）と共に—」

16:10～16:20 休憩

16:20～17:00 全体討論

主催：九州大学基礎教育院・次世代型大学教育開発センター（文部科学省教育関係非営利利用拠点事業）
共催：九州大学附属図書館

九州大学アクティブラーニング教室
**プレゼンテーション教育
を考える**

先着
40名
参加費
無料

2019年10月11日（金）

九州大学 伊都キャンパス 中央図書館4F きゅうと commons
<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/libraries/central/locations>
【対象】プレゼンテーション教育に関心のある大学教職員、高校教員、大学院生

プログラム
15:00～15:35 話題提供1（中野美香）
15:35～16:10 話題提供2（上土井宏太）
16:10～16:20 休憩
16:20～17:00 全体討論

【講師】
中野 美香（福岡工業大学 社会環境学部・准教授）
上土井宏太（九州大学附属図書館 学術サポート課 学習・研究支援係）

【申込方法】
下記アドレスor QRコードよりお申込みください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/form/#form20191011>
※10/7（月）17：00締切
申し込み済に申し込んだら受付を締め切る場合がございますので、ご了承ください。

お問合せ先
九州大学 基礎教育院 次世代型大学教育開発センター
TEL：092-802-8070
Mail：kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp

拠点イベントの
お知らせについて
その他拠点のイベントを掲載しております。
詳しくはHPをご覧ください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/>

開催報告

【参加者情報】

学外：10名（うち県外 0名）

学内：22名

合計：32名



《参考になった点》(抜粋)

- プレゼンテーションの教え方について考える良い機会になった。
- スライド作成 (matter) に大半の時間を掛けていたが、伝え方 (manner) にも同じぐらい時間をかけた方が良い事が分かった。
- 講義外でのプレゼンテーション教育について、図書館での学生支援の方法を具体的に知ることができ参考になった。
- プレゼンテーションに対し、多くの学生が不安を感じていることが分かった。こういうデータはやはり指導している立場の人間でないと分からないことが多いため、参考になった。私も「プレゼンテーション基礎」のTAができれば良いと思った。

【中野先生からのコメント】 コメントありがとうございます。大学生になるとこれまでの経験の差が大きいため、大学生同士で気軽に学び合える場づくりが大事だと思います。プレゼン基礎のTAとして講義でお会いできるのを楽しみにしています。

《分からなかった点・もっと説明してほしい点》(抜粋)

- 中野先生の講義について、学生のパフォーマンスや成長を実際にどのように評価しているか、成績としてどのように反映させているか、といった点について深く聞いてみたいと思った。学生の変化のどの部分を成果として抽出できるか、その方法をさらに知りたいと感じた。

【中野先生からの回答】 ご質問ありがとうございます。プレゼンテーション基礎の評価は、「2回のPPT作成課題と発表(質疑応答含む)」50%、「レポート」20%、「提出物」20%、「授業への貢献」10%としています。レポートは講義の最後に講義前後の自身の変化やプレゼンを学ぶ意義などを自由記述で論述するものです。提出物はルーブリックのアンケート、テキストのワークシート(ポートフォリオ)、授業への貢献度は司会・発言の回数などです。

この中で最も重要だと考えているのが「自身の変化に関するレポート」です。並行反復学習法では、1回目の発表の経験を2回目はどう活かしたか、それを次の機会にどう活かしていくかについての省察が欠かせません。振り返りに含まれる視点が広がっているか、気づきが理論化されているかを評価します。実際に、これまでの研究で、言語化された振り返りの量(文字数)と実際のプレゼンテーションのパフォーマンス(内容・伝え方)には相関があることがわかっています。

- 教育者側のコストについて教えてほしい。(良い教育をするためには教育者に負担を強いるため。)

【中野先生からの回答】 ご質問ありがとうございます。基本的な指導についてはマニュアル化することで教員の負担を減らすことにつながると考えます。大学での半期(90分×15回)の講義で『大学生からのプレゼンテーション入門』を用いた教員用マニュアルがウェブサイトからダウンロードできます。よろしければご笑覧ください。この他、教員自身がプレゼンテーション・スキルを磨いたり、教員間で困ったことを解決できるようなコミュニティづくりも、心理的負担を軽減するために重要だと考えています。

- 図書館でプレゼンテーションの何をどのように教えているか知りたいと思った。

【上土井さんからの回答】 ご質問ありがとうございます。附属図書館では、毎年6月に基幹教育セミナーの受講生を対象として「1年生向けプレゼン講座」を実施しております。

講座の中で、準備の大切さ・話し方のコツ・スライド作りのコツについて、図書館TA(Cuter)が講師となって説明を行うと共に、図書館TA(Cuter)による模擬プレゼンを実施することで、実際のプレゼンテーションをイメージしやすくする工夫をしています。

また、講習会終了後に反省会を行い、見つかった課題を次の講習会に活かすことで、講座の内容を常によりよいものにする努力を行っています。

《FD/SDでの学びの活用について》(令和2年5月アンケート結果より抜粋)

- 教員にもアクティブラーニングに対する意識、図書館職員の授業へのかかわり方への意識に温度差がある。図書館からもっとアピールする努力が必要だと感じている。

九州大学アクティブラーニング教室「ディベート入門講座」

令和元年10月20日(金)に九州大学アクティブラーニング教室「ディベート入門講座」を開催しました。今回のアクティブラーニング教室では、アカデミック・ディベートの方法やディベート教育を取り上げました。午前中の講義ではディベート学習の意義やディベートにおけるスピーチの作成の仕方などの基礎事項を学び、午後には練習試合を通してディベートを体験しました。なお、今回の研修会は、大学院基幹教育科目「ディベート」を開放する形式で開催されました。

開催概要

【日時】令和元年10月20日(日)10:00~18:10

【会場】九州大学 伊都キャンパス

センター1号館3階1304教室

【参加費】無料

【対象】ディベートに関心のある方であれば、どなたでも参加できます。

【定員】24名(先着順)

※午前中の講義は60名程度まで可能です。

【講師】

久保健治(日本ディベート協会・理事)

蓮見二郎(九州大学法学研究院・准教授)

井上奈良彦(九州大学言語文化研究院・教授)

飯島忠樹(JDA九州支部副支部長)

【プログラム】

10:00~11:00 講義「ディベート学習の基本」

11:10~12:10 講義「ディベートの準備の方法」

12:10~13:00 昼休み

13:00~14:30 演習「ディベートの準備」

14:50~16:20 演習「ディベート練習試合と講評」

16:40~18:10 演習「ディベート練習試合と講評」

【ディベート論題】「日本は死刑を廃止すべきである。」(練習試合で使用します)

【主催】日本ディベート協会(JDA)九州支部

【共催】九州大学言語文化研究院、九州大学基幹教育院次世代型大学教育開発センター

主催：日本ディベート協会 (JDA) 九州支部
共催：九州大学言語文化研究院・九州大学基幹教育院次世代型大学教育開発センター

九州大学アクティブラーニング教室
ディベート入門講座

2019年10月20日(日) 九州大学 伊都キャンパス
センター1号館3階1304教室

【対象】ディベートに関心のある方であればどなたでも参加できます

プログラム	10:00~11:00	11:10~12:10	12:10~13:00	13:00~14:30	14:50~16:20	16:40~18:10
	講義:ディベート学習の基本	講義:ディベートの準備の方法	昼休み	演習:ディベートの準備	演習:ディベート練習試合と講評	演習:ディベート練習試合と講評

【講師】
久保健治 (日本ディベート協会・理事)
蓮見二郎 (九州大学法学研究院・准教授)
井上奈良彦 (九州大学言語文化研究院・教授)
飯島忠樹 (JDA九州支部・副支部長)

先着24名
※午前中の講義は60名程度まで可
参加費 無料

【申込方法】
下記アドレスorQRコードよりお申込みください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/form/#form20191020>
※10/16(水)17:00締切
但し定員に達しましたら受付を締め切る場合がございますので、ご了承ください。

お問合せ先
九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
TEL: 092-802-8070
Mail: kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp

拠点イベントのお知らせについて
http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/

その他拠点のイベントを掲載しております。詳しくはHPをご覧ください。

開催報告

【参加者情報】

学外：9名（うち県外 1名）

学内：10名

合計：19名



《FD/SD での学びの活用について》（令和 2 年 5 月アンケート結果より抜粋）

- 研修会で教えて頂いた、反論の立て方、立論の立て方、ディベート体験などを高校生向けにアレンジして、授業や部活動で活用できている。特に、反論を日常の家族との会話から探してこさせるなどの課題は、日ごろの人とのやり取りに目を向けさせるよい機会となった。

カリキュラム設計担当者養成プログラム（上級編）

「学習成果を可視化するーカリキュラムと評価の両面からー」

令和元年11月15日（金）にカリキュラム設計担当者養成プログラム（上級編）「学習成果を可視化するーカリキュラムと評価の両面からー」を開催しました。今回の「上級編」では、教育課程論、教育評価論の観点から、学習成果の可視化について考えました。講師を務めて頂いた松下佳代先生からは、学位プログラムレベルと授業科目レベルをつなぎながら、カリキュラムと評価をデザインするための理論と方法、及びその取組事例（医療系、工学系・文理融合教育）について講演して頂きました。また、講演の後には、参加者同士の意見交換を踏まえたリフレクションも行いました。

開催概要

【日時】 令和元年11月15日（金）13:30～16:00

【会場】 九州大学 伊都キャンパス
ジョナサン・KS・チョイ文化館

【定員】 70名（先着順）

【参加費】 無料

【対象】 学習成果に基づく大学教育に関心のある大学教職員、
大学院生

【講師】 松下佳代
（京都大学 高等教育研究開発推進センター・教授）

【プログラム】

1. 学習成果の可視化を意識したカリキュラムと評価のデザインについて、その理論と方法を学ぶ。
2. 取組事例（医療系、工学系・文理融合教育）を通して、その具体化のあり方を考える。

主催：九州大学基幹教育院次世代型大学教育開発センター（文部科学省教育関係共同利用拠点事業）

主催：九州大学基幹教育院次世代型大学教育開発センター（文部科学省教育関係共同利用拠点事業）

-カリキュラム設計担当者養成プログラム-
（上級編）

学習成果を可視化する
ーカリキュラムと評価の両面からー

先着 70名 参加費 無料

2019年11月15日 (金) 13:30-16:00
九州大学 伊都キャンパス ジョナサン・KS・チョイ文化館
（福岡市西区元岡744） <https://www.kyushu-u.ac.jp/~cfde/form/#form20191115>
※キャンパスマップ5番です。

【対象】 学習成果に基づく大学教育に関心のある大学教職員、大学院生

プログラム

1. 学習成果の可視化を意識したカリキュラムと評価のデザインについて、その理論と方法を学ぶ。
2. 取組事例（医療系、工学系・文理融合教育）を通して、その具体化のあり方を考える。

【講師】
松下佳代（京都大学 高等教育研究開発推進センター・教授）

【申込方法】
下記アドレスor QRコードよりお申し込みください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/form/#form20191115>
※ 11/11 (月) 17:00締切
但し定員に達しましたら受付を終了いたしますので、ご了承ください。

お問い合わせ先
九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
TEL: 092-602-6070
Mail: kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp

拠点イベントのお知らせについて
<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/>

その他拠点のイベントを掲載しております。詳しくは中をご覧ください。
<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/>

開催報告

【参加者情報】

学外：55名（うち県外 38名）

学内：10名

合計：65名



《参考になった点》(抜粋)

- 直接評価と間接評価、および学習成果について。
- 学修成果を学習成果に紐付ける「エキスパートジャッジメント」という役割があることを初めて知った。
- カリキュラム設計でのプログラムレベルと科目レベルの対応関係・可視化、学習成果の評価方法の多様性・評価の関係について参考になった。
- 様々な大学の事例はとても参考になった。
- 新潟大学歯学部の実例は、資格要請を中心とする所属学科の参考になった。特に一定のスパンでパフォーマンス評価を組み入れていく方法は、実践が伴う資格要請には重要だと思われた。
- 他大学の方の貴重な意見が聞けて勉強になった。
- 他大学の方々との意見交換は貴重であった。本学の取り組みについてもアドバイスを頂けた。

《分からなかった点・もっと説明してほしい点》(抜粋)

- 機関レベルでの検証の方法を知りたかった。
【松下先生からの回答】 機関レベルの評価については、今回は触れられませんが、スライド30の機関レベル(直接指標・間接指標)をご覧ください。
- カリキュラムを捉える3つの視点のうち、「スコープ」と「シーケンス」に関して分からなかった。
【松下先生からの回答】 カリキュラム(教育課程)の編成において、「スコープ」はどのような教育内容を選択するのかという範囲、「シーケンス」はそれをどのような順番で配列するかという順序、のことです。
- ミネルヴァ大学の事例の内容が良く分からなかった。
- 分野固有性と汎用性の関係について、もう少し説明してほしい。
【松下先生からの回答】 松下佳代(印刷中)「汎用的能力を再考するー汎用性の4つのタイプとミネルヴァ・モデルー」『京都大学高等教育研究』第25号で書きましたので、ご覧ください。来年1月刊行予定、オープンアクセスです。
- 4つの事例(山形大学・ミネルヴァ大学・新潟大学歯学部・東京都市大学)について、もう少し詳しく説明してほしい。
【松下先生からの回答】 山形大学については、ネット上でかなり拾えると思います。ミネルヴァ大学については、松下佳代(印刷中)「汎用的能力を再考するー汎用性の4つのタイプとミネルヴァ・モデルー」『京都大学高等教育研究』第25号で書きましたので、ご覧ください。新潟大学歯学部については、講演資料の引用文献に挙げていますので、そちらをご覧ください。東京都市大学に

については、来年度から本格的に実施されますので、今後、発信がなされていくと思います。こちらの研修プログラムでも、来年、キーパーソンの伊藤通子先生をお招きする予定と伺っています。

- ダニング＝クルーガー論文の尋ね方や尺度と、各種アンケートで扱われる尋ね方や尺度には違いがあり、後者はかなりの多様性があると思うが、ダニング＝クルーガー効果はどこまで一般化可能なのか。

【松下先生からの回答】ダニング＝クルーガー効果は「特定のパフォーマンスの相対的位置づけの自己認識のバイアス」を説明するものであり、学生調査のリッカートスケールの間接評価のうち「かなり身についている」「まったく身についていない」などのものは、結局のところ他者との相対的比較が回答の大きな手がかりになると考えられますので、このタイプの間接評価には比較的広く一般化が可能なのではないのでしょうか。（ただし、頻度や時間を尋ねるような項目は相対的比較によるものではないので、該当しないと思われます。）

ただし、ダニング＝クルーガー効果のみが、教員による評価と学生による自己評価や間接評価との関連の低さの要因であるとは考えていません。ダニング＝クルーガー効果は自己認識を通じた評価のバイアス（測定の誤差）の中の一つであると思われます。

- 学生のメタ認知が欠如した状態で行う間接評価が問題であれば、メタ認知を促しながら問いに答えさせる間接評価をすることで、間接評価の信頼性を高めることができるのではないかと。

【松下先生からの回答】ここで言われている信頼性とは **reliability** の意味でしょうか。それであれば、間接評価の信頼性は、何度か回答してもらったときの再現性や、同じ構成概念を測定するための項目間の関連の強さによって担保されます。

- 学習成果は大学によって様々であり、可視化された内容についても、現在、全大学共通の様式はないが、社会に見せる場合に、将来的に統一化された内容を示すようになる可能性はあるのか。

【松下先生からの回答】この点については、現在、中央教育審議会の教学マネジメント特別委員会で議論しており、来年の早い時期にガイドラインが出ることになっています。どの大学でも共通に示すべき基本的な情報と各大学の個性・自律性によって異なる情報とがあると思います。全国学生調査の結果を一律に公表すること（本調査ではそうなる予定）については、私自身は賛成ではありません（サンプリングの仕方や調査時期などに問題がある、ベンチマーキングではなくランキングにつながるおそれがあると考えているため）。

- カリキュラム・評価の改革を行っていく上で、必要な教職員のスキル、組織の在り方、改革運営の実施方法などについても教えて頂ければ参考になる。「何を行うか」だけでなく、「どう行うか」は各大学とも関心の高いところではないだろうか。特に小規模私立大学の場合、常に人材難とコストの問題に悩まされており、ゆとりがない中でどのようにすればいいのか、学びたい。

【松下先生からの回答】いくつかすぐれた取組をやっておられる小規模私立大学（前橋国際大学など）の事例から学べるのではないのでしょうか。

- 大学自らが、変わらなければならないことに気付き、行動に移すためには必要なことは何でしょうか。

- **【松下先生からの回答】**すべての問題解決に共通していることですが、まずは目標と現状のギャップに気づくことではないでしょうか。その前提として、自分の所属する大学・学部・学科の教育をもっとよくしたい、目の前の学生たちの学びや成長に関わりたいという気持ちが必要だと思います。

《その他》(抜粋)

- インスティテューショナル・リサーチ (IR) に関する事例紹介などがあると有り難い。
【事務局からのコメント】本拠点の専門的職員養成モジュールでは、「カリキュラム設計担当者養成」だけでなく「インスティテューショナル・リサーチャー養成」や「アドミッション・オフィサー養成」に関する研修会も企画しております。「インスティテューショナル・リサーチャー養成」に関する研修会は、今年度は1月と3月に開催予定です。詳細が決まり次第、本ウェブサイトやメーリングリストにて案内させていただきます。

《FD/SDでの学びの活用について》(令和2年5月アンケート結果より抜粋)

- 学内外で発言される学部教員やカリキュラム設計担当者の発言を理解しやすくなった。
- 統合型授業 (PBL・TBL) を組み合わせた授業を柔軟に実施できている。
- 学内でフィードバックしてFDに繋がたいと思っている。

九州大学アクティブラーニング教室「テクニカルプレゼンテーション」

令和2年1月11日(土)・12日(日)に九州大学アクティブラーニング教室「テクニカルプレゼンテーション」を開催しました。今回の九州大学アクティブラーニング教室は、参加者それぞれのプレゼンテーション能力を高めることを目指した実践的な機会としました。研修会当日は、プレゼンテーションの一般的な考え方や注意点を学ぶことから始め、ビブリオバトルやショートプレゼンの実践・改良を行いました。参加者はグループワークも通して、相互にプレゼンテーションについて学び合いました。

開催概要

【日時】 令和2年1月11日(土)・1月12日(日)

【会場】 九州大学 伊都キャンパス
センター3号館 3105・3106 教室

【定員】 20名(先着順)

【参加費】 無料

【対象】 プレゼンテーションに関心のある大学教職員、
大学生・大学院生、高校教職員

【講師・ファシリテーター】

長谷川光一(大阪工業大学 知的財産研究科・准教授)

【プログラム】(適宜休憩を挟みます)

1日目(1/11): 10:30~18:10

1) 講義: プレゼンテーションの基礎
アカデミックプレゼンテーションの特徴と弱点

2) チームビルディング

3) スキルトレーニング1: 自分のプレゼンの特徴に気づくー如何に伝わらないか・どう伝わっているか

4) スキルトレーニング2: ビブリオバトルを用いたプレゼン構造理解1(論理と感情)

2日目(1/12): 10:30~18:10

1) スキルトレーニング3: ビブリオバトルを用いたプレゼン構造理解2

2) スキルトレーニング4: 時間管理と抽象化 手短かに伝えられるか

3) プレゼンツールのインパクト Preziによるプレゼン

4) 講義とまとめ

主催: 九州大学基幹教育院・次世代型大学教育開発センター(文部科学省教育関係共同利用拠点事業)

九州大学アクティブラーニング教室 テクニカルプレゼンテーション



	1月11日(土)	1月12日(日)
プログラム	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義: プレゼンテーションの基礎 アカデミックプレゼンテーションの特徴と弱点 2. チームビルディング 3. スキルトレーニング1: 自分のプレゼンの特徴に気づくー如何に伝わらないか・どう伝わっているかー 4. スキルトレーニング2: ビブリオバトルを用いたプレゼン構造理解1 論理と感情 	<ol style="list-style-type: none"> 1. スキルトレーニング3: ビブリオバトルを用いたプレゼン構造理解2 2. スキルトレーニング4: 時間管理と抽象化 手短かに伝えられるか 3. プレゼンツールのインパクト Preziによるプレゼン 4. 講義とまとめ

【講師】 長谷川光一(大阪工業大学・准教授)

【申込方法】
下記アドレスor QRコードよりお申込みください。
※学内書につきましては、PDFファイルの利用をお願いします。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/form/#form20200111>
※ 1/6(月) 17:00締切(申し込み完了したら受付を締め切る場合がございますので、ご了承ください。)



お問い合わせ先 九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
TEL: 092-802-6070 Mail: kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp

拠点イベントのお知らせについて <http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/>

その他拠点のイベントを掲載しております。詳しくはHPをご覧ください。

【持参するもの】

- 1) これまでに実施したプレゼンテーション資料およびその論文（できれば 1 部印刷しておく）。プレゼン資料は 20 分～30 分程度の発表時間を想定したもの。
（参加者同士でブラシアップするために使用します。）
 - 2) 自分が面白いと思っている書籍 1 冊（できるだけ自身の専門分野外のもの）
-

開催報告

【参加者情報】

学外：6 名（うち県外 3 名）

学内：4 名

合計：10 名

《参考になった点》（抜粋）

- プレゼンテーションする際、「テーマや主張」「相手に行動を起こさせたいこと」「事実（データ、事例、理論）」「まとめ」を一度ノートに整理して資料を作るようになった。
- ラボリトリートなどで、チームビルディングの方法を取り入れたい。また、ラボミーティングで、スライドなしのプレゼンテーションの機会を取り入れたい。
- ビブリオバトルを授業に取り入れて生徒のプレゼンテーション能力を上げていきたい。
- 自分が担当する授業でもビブリオバトルを実施していたが、時間の関係で期末のラスト 1 コマのみを使っていた。今回の研修会で、ブラッシュアップした 2 回目を行なったことが、発表者の工夫や、読書の仕方自体にも影響を与えることに改めて気付かされた。反省だけではなく、次に活かすことが大事だなと思った。今後はなんとか 2 コマを捻出して実施できればと思った。

【長谷川先生からのコメント】 振り返りと改善、第 2 回目の発表の場は、本人の成長にも周囲の気づきにも重要だと思います。

《分からなかった点・もっと説明してほしかった点》（抜粋）

- 長谷川先生の専門知識をもっと伺いたかった。でも今回は、参加者が体験学習に満足されていたのでこれで良かったとも思った。

【長谷川先生からの回答】 集中講義ということで互学互習のスタイルにしています。座学というか私が話す時間をもっと増やしたいのですが、時間が不足気味のため、悩ましいです。もう少し全体を調整してみたいと思います。

- 学会発表（専門家に対するもの）と授業（初学者に対するもの）での発表の違いについて知りたかった。

【長谷川先生からの回答】1点だけ挙げるとすれば、前者は専門知識を増やすために、好奇心を持って聞くのに対し、後者は専門知識を学ぶために聞いています。私が講義をする際には、後者は”自分の想定以上にわかっていないことがあるので、それを探索することも忘れない”という意識で資料を作っています。

- 参加者への案内に、持参する本はビブリオバトルに使用するという情報を加えて頂けるとさらに助かる。スケジュールにはビブリオバトル、持参するものには本と記載があったが、ビブリオバトルの内容を知らない人には、この情報が書いてあるとずいぶん助かると思う。

【長谷川先生からの回答】今回は少しあいまいな表現だったと思うので、次回には明記したいと思います。

- 二日目のプレゼンのための準備時間がもう少しほしかった（1週間くらい）。その理由は、5分のプレゼンでもいつもそれくらい準備に時間をかけるので、いつものレベルのプレゼンに対する評価がほしかったから。できる人だけでも1分か5分のプレゼンがあるので事前に準備しておくこと、と課題を出しても良いかもと思った。

【長谷川先生からの回答】集中講義の日程を空けてもよいかと検討はしましたが、瞬発力を養う意味もあり、今回のような日程にしました。1分・5分の課題については事前に出しておくことを検討したいと思います。

《FD/SDでの学びの活用について》（令和2年5月アンケート結果より抜粋）

- 授業や講演で、トピックの選び方が変わったと思う。
- 常に短く端的に表現するようになった。
- プレゼン資料作成前に構想をしっかり立てるようになった。

IR 初級人材育成研修会

令和2年1月23日(木)にIR初級人材育成研修会を開催しました。今回の本研修会では、IR担当になったばかりの方を対象として、業務を進める上での課題や注意点、多くの大学で直面しているデータ管理について取り上げました。午前中にはIRの概論とデータマネジメントに関する講義があり、午後には参加者それぞれの大学で抱えているIRの課題についてグループディスカッションを行いました。

開催概要

【日時】令和2年1月23日(木) 10:00～17:00

【会場】JR博多シティ会議室 10階大会議室C・D

【定員】40名(先着順)

【参加費】無料

【対象】IR活動に従事して間もない大学教職員(従事して1年未満の大学教職員)、これからIR活動を行っていくとしている大学教職員

【講師】

小湊卓夫(九州大学 基幹教育院 准教授)

齋藤渉(東北学院大学 学長室 IR 課)

佐藤仁(福岡大学 教育開発支援機構 教学 IR 室長)

藤原宏司(山形大学 学術研究院 教授)

藤井都百(九州大学 IR 室 准教授)

【研修会概要】

第1部(10:00～11:40)

10:00～10:05 趣旨説明(小湊)

10:05～10:45 講義1:IR初級概論(小湊)

10:45～10:55 休憩

10:55～11:40 講義2:IRにおけるデータマネジメント(藤原)

第2部(13:00～17:00)

13:00～14:00 質疑応答(小湊・齋藤・佐藤・藤原・藤井)

14:00～16:30 演習(小湊・齋藤・佐藤・藤原・藤井)

16:30～17:00 まとめ(小湊・齋藤・佐藤・藤原・藤井)

【後援】大学評価コンソーシアム



主催: 九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター 後援: 大学評価コンソーシアム

IR初級人材育成研修会

参加費 無料 先着 40名

2020年 1月23日(木)10:00～17:00
JR博多シティ10階大会議室CD(福岡市博多区博多駅中央街1-1)
<https://www.jrhakacity.com/communicationspace/meetingroom/>

【対象】IR活動に従事して間もない大学教職員(従事して1年未満の大学教職員)
これからIR活動を行っていくとしている大学教職員

小湊卓夫(九州大学基幹教育院 准教授)
齋藤渉(東北学院大学学長室インスティテューショナル・リサーチ(IR)課)
佐藤仁(福岡大学教育開発支援機構教学IR室 室長)
藤原宏司(山形大学学術研究院 教授)
藤井都百(九州大学インスティテューショナル・リサーチ室 准教授)

プログラム詳細や参加申込については下記アドレスかQRコードからご覧ください。
<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfdt/form/#form20200123>
1月17日(金)17:00(ただし、定員に達し次第、受付を終了します。)

お問合せ先 九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
TEL: 092-802-6070
Mail: kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp

拠点イベントのお知らせについて

その他イベント情報を掲載しております。詳しくはHPをご覧ください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfdt/>

開催報告

【参加者情報】

学外：43名（うち県外 30名）

学内：4名

合計：47名



《参考になった点》（抜粋）

- POWER BI を使うようになった。
- 山形大学藤原先生の講義の中で、分析後の処理として、作業手順を記録しておくことが重要であるとお話頂き、作業手順の記録を行うようになった。次回同様の分析を行う際や他の人が作成する時に同じ条件、手順で作業を行えるよう作業手順の記録を徹底していきたいと思っている。
- 他大学の状況を本学執行部に報告し、参考にさせてもらっている。
- IR 室員の気持ちが分かるようになった。そして、IR 室員が分析・作成したデータや資料の見方が変わった（どのような意図で作成されたものかを考えたり、改善点などを考えたりするようになった）。自身の業務においても、どのようなデータ・分析・資料などが必要かといったことを考えるようになった。
- IR の考え方や見方が変化した。IR に関する本学の課題が明確になったので、できるところから着手しなければならないという気持ちになった。

《FD/SD での学びの活用について》（令和 2 年 5 月アンケート結果より抜粋）

- 組織的な調整不足によって、まだ活用できていない。
- 参考にはなったが、自分自身が IR 担当部署にいるわけではないので、活用の機会が少ない。

継続的改善のための IR/IE セミナー

令和2年1月24日（金）に継続的改善のための IR/IE セミナーを開催しました。今回のセミナーでは、現在の課題と今後の可能性・展望についての情報共有し課題を整理すべく、三つの大学からの事例報告をして頂きました。また当日は、事例報告を踏まえて、論点整理をし、参加者からの質問に基づいたパネルディスカッションを行いました。

開催概要

【日時】 令和2年1月24日（金）10:00～16:00

【会場】 九州大学 伊都キャンパスセンター2号館 2307 教室

【定員】 80名（事前申込制、先着順）

【参加費】 無料

【対象】 IR や内部質保証の活動に従事している大学教職員、
IR や内部質保証に関心を持っている大学教職員

【概要】

10:00～10:10 趣旨説明 小湊卓夫（九州大学基幹教育院）

10:10～10:50 事例報告1「山形大学における IR/IE の実践事例」 浅野茂（山形大学 学術研究院）

10:50～11:30 事例報告2「教学 IR ができること・できないこと：福岡大学の取り組みから」
佐藤仁（福岡大学教育開発支援機構教学 IR 室長）

休憩

13:00～13:40 事例報告3「ラーニングアウトカムに基づく IR が果たすアセスメントへの貢献」
齋藤渉（東北学院大学学長室インスティテューショナル・リサーチ（IR）課）

13:40～14:40 質疑応答

休憩

15:00～15:20 論点整理 小湊卓夫

15:20～16:00 パネルディスカッション

【後援】 大学評価コンソーシアム

主催：九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター 後援：大学評価コンソーシアム

継続的改善のための IR/IE セミナー

参加費 無料 先着 80名 事前申込制

2020年 1月24日（金）10:00～16:00
九州大学伊都キャンパスセンター2号館2307号室（福岡市西区元岡744）
https://www.kyushu-u.ac.jp/f/37289/2019ts_3.pdf ※MAP60番

【対象】 IRや内部質保証の活動に従事している大学教職員、
IRや内部質保証に関心を持っている大学教職員

小湊卓夫（九州大学基幹教育院 准教授）
齋藤渉（東北学院大学学長室インスティテューショナル・リサーチ（IR）課）
佐藤仁（福岡大学教育開発支援機構教学IR室 室長）
浅野茂（山形大学学術研究院 教授）
藤井都百（九州大学インスティテューショナル・リサーチ室 准教授）

プログラム詳細や参加申込については下記アドレスかQRコードからご覧ください。
<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/cfde/form/#form20200124>
1月17日（金）17:00（ただし、定員に達し次第、受付を終了します。）

お問合せ先 九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
TEL：092-802-6070
Mail：kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp

拠点イベントのお知らせについて <https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/cfde/>

その他イベント情報を掲載しております。詳しくは中をご覧下さい。
<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/cfde/>

開催報告

【参加者情報】

学外：72名（うち県外 52名）

学内：7名

合計：79名



《FD/SD での学びの活用について》（令和2年5月アンケート結果より抜粋）

- 学内でアセスメントプランの策定や教学マネジメントの議論をする上で、知識として役立っている。
- 研修会で理解できなかったキーワードを自分なりに調べるなどして知識獲得に繋がった。
- IR・IEの担当部署ではないので業務に直結はしていないが、本学の状況を客観的に評価するために、他大学の状況や実例を参考にしている。
- 他大学事例を参考に、自己のIR業務内容を検討する機会となっている。
- 学内会議で他校ではどのような取り組みを…、とよく聞かれるので、その一例として活用させて頂いている。
- 授業評価アンケート実施方法の見直しに際して、他大学での実践例として参考にした
- 各大学のIR体制を聞いて、体制の改善・整備を検討する上で参考にしている。
- 発表内容から得たヒントを自大学の特色に合わせて改善し、学内に提案している。
- 実質的な、IR活用の仕組みや体制を今後検討していく上での判断材料になったと思う。
- まだ本学で取り組むべき課題が多く、活用までたどり着けていない。

カリキュラムを補完する準正課活動の設計に関する FD

令和2年1月31日（金）にカリキュラムを補完する準正課活動の設計に関するFDを開催しました。今回のFDでは、初年次全寮制と共に大学が多様な活動機会を提供している福岡女子大学から和栗百恵先生をお招きし、準正課・課外活動と正課教育との補完性に焦点を当てて、実践例をご紹介頂きました。質疑応答や参加者同士の意見交換では、学生中心の教育の在り方について議論を深めました。

開催概要

【日時】 令和2年1月31日（金）15:30～17:00

【会場】 九州大学 伊都キャンパスセンター1号館 1209号室

【定員】 40名（先着順）

【参加費】 無料

【対象】 カリキュラム運営や設計に従事している大学教職員、カリキュラム運営や設計に関心のある大学教職員

【講師】

和栗百恵（福岡女子大学 国際文理学部・准教授）

主催：九州大学基幹教育院次世代型大学教育開発センター（文部科学省教育関係共同利用拠点事業）

カリキュラムを補完する
準正課活動の設計に関する
FD

先着
40名

参加費
無料

2020年1月31日（金）15:30-17:00

九州大学 伊都キャンパス センターゾーン1号館1209号室
（福岡市西区元岡744） https://www.kyushu-u.ac.jp/f/31269/2019to_3.pdf
※キャンパスマップ59番です。

【対象】 カリキュラム運営や設計に従事している大学教職員、
カリキュラム運営や設計に関心のある大学教職員

【講師】

和栗百恵（福岡女子大学 国際文理学部 准教授）

【申込方法】

下記アドレスor QRコードよりお申込みください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfdt/form/#form20200131>
※1/27（月）17:00締切
但し定員に達しましたら受付を終了いたしますので、ご了承ください。



お問合せ先



九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
TEL: 092-802-6070
Mail: kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp

拠点イベントの お知らせについて

その他拠点のイベントを掲載しております。
詳しくはHPをご覧ください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfdt/>

開催報告

【参加者情報】

学外：14名（うち県外5名）

学内：7名

合計：21名



《参考になった点》(抜粋)

- 準正課の定義がはっきりとしたことで、これからの企画・運営を行う際の参考になった。
- 学生が関与している委員会活動の整理が必要である点は納得できた。
- 準正課の取り組みを全学的な形にするご苦労・ご経験は参考になった。個別に行なっている準正課の活動を整理するだけでも相当な作業であったのではないかと思った。
- 大学という文脈において、これから新しく何かに取り組もうとする際に応用できる気付きを得ることができた。

《分からなかった点・もっと説明してほしい点》(抜粋)

- トップダウンではなく、教員主導で準正課活動を設定する場合のアプローチの方法が知りたい。例えば、理系研究室で、学部学生のような研究室に所属する前の学生を対象に有給のインターンを実施したいと考えている。大学として取り扱ってもらうための方策や、それを支援する文科省の政策やプロジェクト等の情報をご存じだったら教えて頂きたい。
- **【和栗先生からの回答】**
 - ・ その「有給インターン」の目的はクリアになっていますか？その活動を通じて「学生がどのような能力等を培うことができるか？」の説得材料の準備をされていますか？
 - ・ 「準正課」とするには、大学が組織的に、単位を課さずともその活動を学生の学習経験の中に必須と位置付けている必要があります。
 - ・ 教学マネジメントの担当者と、例えば大学(学部・学科) DP との関連の中、想定されている「有給のインターン」活動を通じて育成できそうな資質・能力・スキル・知識があるかを話し合ってみるのが第1歩になるかもしれません。
 - ・ 文科省は学士課程答申頃から、課外活動も含めて4年間の学習経験、という考えを示しています。
- 準正課活動の教育的な効果をどのように測定しているのかについて、お聞きしたかった。
【和栗先生からの回答】「測定」には至っていませんが、毎年実施する学生意識調査では全寮制で学びとれたものを記述する項目があります。学生委員の取組については、昨年度から「ナラティブ」として発信を始めているところです。
- 準正課活動や課外活動で得られたコンピテンスをどのように測るのか知りたかった。
【和栗先生からの回答】方法はいくつかあるかと思います。before/after 自己評価的なものとするのか、アセスメントテストを用いるのか。本学では海外体験(正課)についてはPEPAを導入しています。
- 教育学の一側面としてのカリキュラム研究の視座から準正課活動をどう捉えていくべきかをもう少し議論してみたいと思った。

【和栗先生からの回答】 Co-curricular の「Co」の検討ですね。「課外活動」が企図されないゆえの豊かな学びの土壌を持ってきたとすると、学習成果の可視化や教育の質保証といった言説が氾濫する中で、「カリキュラム」に吸収されてしまう危うさ（？）のようなものもありますね。

- 夏の集中講座で準正課として開講していたものが、正課に変わったケースがある。それは、その科目の位置づけがどうというよりも、大変な労力のかかる科目で、単位が付かないことが学生から不評だったためというのが正課になるきっかけだったと聞いた。また、大学に近い場所で災害があり、復旧ボランティアとして学生が動員されたときも正課になったと聞いた。その際は、単なるボランティア参加だけで単位認定するわけにはいかないの、レポート等の課題を追加することで対応していた記憶がある。カリキュラム設計に基づかない、そのときの成り行きで出来ている科目も相当あるのではないかと思った。

【和栗先生からの回答】「カリキュラム設計に基づかない、成り行きで出来ている科目」…課外活動に限らず、専門科目であっても「カリキュラム設計」を体現し得ない属人的な実践があるかもしれませんね。

《FD/SD での学びの活用について》（令和 2 年 5 月アンケート結果より抜粋）

- 本研修を元に既存の正課外活動を整理するガイドラインを策定した。今後のカリキュラム改正では、正課外も含めて検討する必要があることが理解でき、視野が広がった。
- 部活動やボランティア活動に対して、積極的に評価するようになった。

大学院理系研究室のマネジメントー風通しの良い研究室の構築に向けてー

令和2年2月17日(月)に「大学院理系研究室のマネジメントー風通しの良い研究室の構築に向けてー」を開催しました。今回の研修会では、多くのPI(Principal Investigator、主任研究員)が苦慮している研究室運営(ラボラトリーマネジメント)を取り上げました。当日は、北海道大学の谷口勇仁先生に、経営学の観点から、学生とのコミュニケーションにおいて「教員が勘違いしていそうなこと」などについて、お話し頂きました。参加者は、谷口先生の講演とグループワークを通して、学生のモチベーションを引き出すラボラトリーマネジメントについて考えを深めました。

開催概要

【日時】令和2年2月17日(月)16:00~18:00

【会場】九州大学 伊都キャンパス
センター3号館1階3105・3106教室

【定員】30名(先着順)

【参加費】無料

【対象】研究室運営に携わる研究者、PI(Principal Investigator)を目指す研究者、研究者を目指す学生、研究室運営に関心を持つ大学関係者

【講師】谷口勇仁(北海道大学 経済学研究科・教授)

※内容は昨年2月20日に実施したFD講演会と多くが重複いたします。

主催：九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター（文部科学省共同利用拠点事業）

九州大学FD講演会
大学院理系研究室のマネジメント
ー風通しの良い研究室の構築に向けてー

先着 30名 参加費 無料

2020年2月17日(月)16:00~18:00
九州大学伊都キャンパス センターゾーン センター3号館1階3105・3106号室(福岡市西区元岡744)
http://www.kyushu-u.ac.jp/f/37269/20190a_3.pdf ※左記キャンパスマップの61番です。

【内容】本研修では、経営学の観点から、学生とのコミュニケーションを中心に「教員が勘違いしていそうなこと」をお話します。具体的には、「教員がふかれと想ったこと」が学生に悪影響を及ぼすケースについて、ワークをしながら考えてもらい、その対処法について理解を深め、マネジメントの感受性「あつ、これはマネジメントの問題なんだ！」と気づくことを高めていきたいと思います。

【対象】研究室運営に携わる研究者、PI(Principal Investigator)を目指す研究者、研究者を目指す学生、研究室運営に関心を大学関係者。

講師：谷口 勇仁 (北海道大学 経済学研究科 教授)

プログラム詳細や参加申込については下記アドレスか、QRコードからご覧ください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/form/#form20200217>
※申込締切：2/13(木)17:00(ただし、定員に達し次第、受付を終了します。)

お問合せ先 九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
TEL：092-802-6070
Mail：kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp

拠点イベントのお知らせについて <http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/>

その他拠点のイベントを掲載しております。詳しくはHPをご覧ください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/>

開催報告

【参加者情報】

学外：3名(うち県外3名)

学内：12名

合計：15名



《参考になった点》(抜粋)

- ラボの問題を人やシステムの問題で無く、マネジメントの問題と捉えて解決法を模索するという考え方は、たいへん参考になった。
- 経営学的な視点でのモチベーション管理は非常に参考となった。
- 組織的怠業について。実例を当てはめて解説して頂けたので、今後生かせると実感した。
- ヒラメパラドクスは自分が学部ゼミでまさに体験したこと（まさに「先生の中では答えがあるはずなのに」と発言した記憶がある）なので腑に落ちた。個々人の研究だからといって指示を疎かにしないようにすべきと納得できた。
- 教職員に求められるマネジメントが項目ごとに完結に説明されたので学生にも分かり易かった。
- 学生の指導法について、陥りがちな状況（例えば、学生が頑張るほど教員からの指示が増える、新入学生に明確に指示を出さない、など）を挙げ、その悪影響について根拠と共に明確に説明されていた。私の所属する研究室でも、教授の指導がまさしくそのような状況であり、私や学生たちがずっと苦しんでいたため、非常に納得できた。

《分からなかった点・もっと説明してほしい点》(抜粋)

- 指示的行動・援助的行動の定義が曖昧で、よく理解できなかった。
【谷口先生からの回答】説明不足でごめんなさい！指示的行動とは、何を、いつ、どこで、どうやるかを指示し、目標やタスクを明確にすることです。他方、援助的行動とは、学生の努力を支援し、意見に耳を傾け、自信を持たせることです。詳しくは、ブランチャード 他 (2015)『新1分間リーダーシップ』ダイヤモンド社 で説明されているのでお読みいただければよいかと思います。
- 前半の導入に割く時間を後半の内容の説明に当てた方がよいと感じた。後半の内容が良いだけに、飛ばし飛ばしになるのが勿体無い。
- スライドで示されていた最後の事例に基づく知見の部分はもう少し説明が欲しかった。
【谷口先生からの回答】ご指摘、ありがとうございます。最後は駆け足になってしまい申し訳ありませんでした。実は昨年度の研修会(2019年2月20日実施)は90分でしたが、時間が足りなかったため、今回は120分に設定させていただきました。しかし、色々お話ししたいことが多いため、結局最後は駆け足になってしまいました。次回からは駆け足になってもよいように、後半部分の配布資料を充実させたいと思います。
- 配布されたスライド資料は一部だったが、他の部分についても著作権上問題がない部分を研修会終了後でも良いので、もらえると助かる。
【谷口先生からの回答】この研修は、問題を解いていく過程で帰納的に理論を理解するというスタイルを採用しているため、事前に問題の答えを資料として配れません。ただ、研修終了後に資料を配布することは可能ですので、今後の研修では検討したいと思います。ご指摘、ありがとうございました。

- 研究室運営を改善することのゴールには何を設定したら良いのだろうか。学生が卒業・修了することか。学生と教員のコミュニケーション量が増えることか。それとも、卒論・修論のクオリティが上がることか。

【谷口先生からの回答】ご指摘、ありがとうございます。非常に重要な課題だと思います。抽象的な目標は、「研究・教育の質の向上」だと思いますが、ご質問にあるような具体的な目標は状況（研究分野、PIの経験・価値観、ラボの年数等）によって異なると思います。研修では触れませんでした。ラボ（学生）にとって魅力的な目標を設定することはマネジメントにとって非常に重要です。まずは卒業生に「何を目標にしていたか、何を目標にしたらよいのか」についてインタビューしてみるとよいと思います。

- 教職員が発揮すべきリーダーシップとセットで、学生側に求められるフォロワーシップについても考えてみたかった。講義の中でもマネジメントは教職員だけの問題ではないというところから話が始まっていたので、もしまた谷口先生が来られる機会があれば少し盛り込んでほしい。

【谷口先生からの回答】ご指摘、ありがとうございます。非常に重要な課題だと思います。実は昨年度の研修会（2019年2月20日実施）では学生に向けてのメッセージも付け加えていましたが、受講者のほとんどが教員であったため、今回の研修会では割愛した次第です。すごく簡単に言えば、「PIの発言や行動を表面的に解釈して右往左往するのではなく、冷静沈着に対応すること」が重要だと思います。機会があれば是非お話ししたいと思います。

- 学生にも役立つ内容であったと思う。谷口先生が「“ラボマネ”を流行らせたい」と仰っていたことにとても共感できる。本講演会の継続を希望する。より多くの教職員がこうしたアイデアに触れる機会を積極的に作るべきと思うし自分自身、できるかぎり広めたいと思っている。

【谷口先生からの回答】ありがたいお言葉、感謝申し上げます。「ラボマネ」という言葉が理系教員の間で一般的になれば、研究室のトラブルに直面した際、「これだから最近の学生は～」という解釈ではなく、「ラボマネをしくじった！」という解釈をするようになり、学生や教員にとって生産的な問題解決が可能になると考えています。共感していただき、ありがとうございます！

《FD/SDでの学びの活用について》（令和2年5月アンケート結果より抜粋）

- 学生への指示の出し方の工夫や研究へのモチベーションを保ってもらおう工夫は参考にしている。

リベラルサイエンス教育開発 FD「科学の考え方を育てる授業開発ワークショップ」

令和2年2月18日（火）にリベラルサイエンス教育開発 FD「科学の考え方を育てる授業開発ワークショップ」を開催しました。今回のリベラルサイエンス教育開発 FDでは、京都大学総合博物館の塩瀬隆之先生をお招きし、科学リテラシーや探究力を育成するような授業をどう作るのかについて、グループワークを交えながら、講演して頂きました。

開催概要

【日時】 令和2年2月18日（火）14:50～16:50

【会場】 九州大学 伊都キャンパス
センター3号館1階3105・3106教室

【定員】 30名（先着順）

【参加費】 無料

【対象】 科学教育や科目開発に関心のある大学教職員、大学生・大学院生、高校教職員

【講師】 塩瀬隆之（京都大学 総合博物館・准教授）

【プログラム】

14:50～16:20 塩瀬先生による講演およびワークショップ
（適宜、質疑応答を含みます。）

16:20～16:25 休憩

16:25～16:50 希望者での意見交換

主催：九州大学 基幹教育院次世代型大学教育開発センター（文部科学省教育関係共同利用拠点事業）

リベラルサイエンス教育開発FD

科学の考え方を育てる³ 授業開発ワークショップ^C

定員 30名
参加費 無料

2020年 2月18日（火） 九州大学 伊都キャンパス
センター3号館3105・3106教室

https://www.kyushu-u.ac.jp/f/37269/2019ro_3.pdf ※MAPの61番の建物です。

【対象】 科学教育や科目開発に関心のある大学教職員、大学生・大学院生、高校教職員

プログラム

14:50～16:20
塩瀬先生による講演およびワークショップ（適宜、質疑応答含む）
16:20～16:25 休憩
16:25～16:50 希望者での意見交換

講師 塩瀬隆之（京都大学 総合博物館・准教授）


【申込方法】
下記アドレスor QRコードよりお申込みください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/form/#form20200218>
※2/14（金）12:00締切
但し定員に達しましたら受付を締め切る場合がございますので、ご了承ください。

お問合せ先

九州大学 基幹教育院
次世代型大学教育開発センター
TEL: 092-802-6070
Mail: kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp

拠点イベントの
お知らせについて

その他拠点のイベントを掲載しております。
詳しくは下記をご覧ください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/>



開催報告

【参加者情報】

学外：8名（うち県外5名）

学内：9名

合計：17名



《参考になった点》(抜粋)

- 公開講座等における場作りと科学コミュニケーターの重要性について、また、PISAの結果についてのお話しは大変参考になった。
- 現在の学校教育が工業人材の育成に留まっているとの指摘は、教育者として反省しなければならないと思った。
- 探究活動は「ただ集めること、ただ数えることから始めて、違和感に気づき、仮説を立てること」によっても始められるということを学んだ。
- 科学と言われると難しく考えがちだが、シンプルにまず集める・数える・並べるといったところから見えてくる疑問や事象を考え、観察する姿勢を特に参考にしたいと感じた。
- アリの脚の話が大変参考になった。自身の観察の足りなさを実感し、視野が狭くなっているのが良く分かった。なので、講義を受けた学生が広い視野を持つことを意識するような授業を目指したいと感じた。
- 流行りのアクティブラーニング授業を単に取り入れるだけでは意味がなく、教える側がもっと考えて授業を行わなければならないことを痛感した。

《分からなかった点・もっと説明してほしい点》(抜粋)

- アリのお絵かきなどのカガクノミカタの取り組みは、そこから何を学んでもらうことを想定しているのか、どのようなメッセージを伝えたいと考えているのか。
【塩瀬先生からの回答】カガクノミカタの番組制作意図は、〈仮説－実験－考察〉のプロセス以前に「観察」の重要性を届けることです。科学がスーパーサイエンスハイスクールや大学の研究室でないと出来ないという思い込みを払拭し、ありふれた日常生活の中で目を凝らせば発見につながることを伝えたいと考えて制作しています。
- 前半のカガクノミカタの話をもっと聞きたかった。
【塩瀬先生からの回答】ネットの検索で「カガクノミカタ」と入力くださると HP から動画も見られますし、2019年9月より書籍版カガクノミカタも発刊いたしました。利用方法などもそこにしたためていますので、よろしければご参考ください。
- 教科書を端から端まで読みたくなる問いの立て方のコツを教えてください。
【塩瀬先生からの回答】〈学習内容→楽しむ〉の順番では、生徒が退屈してしまいます。〈まずは楽しむ→その中に学習内容を見出す〉の手順でアイデアを考えることが最善のコツだと思います。その代わり2~3個ではなく、10も20も、たくさんのアイデア出しが必要になります。
- 科学の見方について最先端の取組を学べる媒体や機会はどこにあるのか。
【塩瀬先生からの回答】地元の科学館や博物館は素材の宝庫です。最近では企業博物館も増えてきています。ただし、授業のように受け身で過ごす科学館も博物館もなかなか楽しむことが難しいですが、それぞれの施設が用意されている科学ワークショップも面白いものが増えてきているので、積極的

な活用をご検討ください。

- FD の途中で紹介された画像の中にある iPS 細胞の数を教えてください。

【塩瀬先生からの回答】 種明かしになるので控えさせていただきます。4月8日以降、展示会場でご覧ください。もしかしたら来館者が SNS に上げられる可能性があります…そこまでは制限の予定はありません。

※ 2020年4月8日(水)～6月14日(日)に京都大学総合博物館 2020年度特別展・京都大学 iPS 細胞研究所 (CiRA) 設立 10周年記念展示「iPS細胞、軌跡と未来」が京都大学総合博物館にて開催されます。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催が「当面延期」となっています(2020年7月31日時点)。

4 本拠点事業への要望

次世代型大学教令和2年5月に行ったアンケート結果のうち、本拠点事業への要望に関する回答を以下に掲載する。

《今後の研修会で扱ってほしいテーマ》(抜粋)

【専門的職員養成に関するもの】

- IR 業務の実践的な事例やツールの具体的な使い方。
- 実践的な IR の研修会があれば参加したいです。
- IR 関連での失敗例とその解決例。
- IR 組織の立ち上げ期から充実期に向けての人材の確保（養成）事例について。
- カリキュラム設計に関する研修。
- 入試に関するアセスメント。
- 「教学マネジメント指針」を読み込む。

【オンライン授業に関するもの】

- 効果的なオンライン授業について。
- オンライン講義で伝わる資料の作り方。
- 遠隔授業について（オンデマンド対応はどうかなど）。
- 危機管理や講義のあり方（遠隔授業等）、学生支援の方策（金銭面やメンタルケア）などについて。

【その他】

- 他大学の具体的な取組事例を紹介してほしい。
- 授業デザインのヒントや成功・失敗例など。
- 学生ポートフォリオやディプロマサプリメントの今後について。
- 引き続きテクニカルプレゼンテーションの FD があると良い。
- グループワークに消極的な学生への対処方法。

《その他、拠点事業に対する要望》(抜粋)

- ワークショップ等の予定を早めに公表して欲しい。入試等と重ならないようにしてほしい（国公私の日程がばらばらなので、難しいかもしれないが）。

【事務局からのコメント】ご要望ありがとうございます。以前も同様のご要望を頂いております。年

度初めに年間スケジュールを公開することや、できる限り早めの広報を心がけていきます。

- 東北・関東、またはオンラインで開催されるのがあれば教えてほしい。

【事務局からのコメント】これまでも共催企画を九州外で実施したことがございます。今後、東北や関東でも共催企画を実施する可能性はございますが、今のところ実施予定はありません。また、オンライン開催については2020年7月より開始しています。研修会の情報は、随時、ウェブサイトやメーリングリストで配信いたしますので、そちらをチェックして頂けると幸いです。

- 初心者でも参加しやすい雰囲気で開催頂き、有難い。まだ知識がなく、何か質問をしたくてもなかなか自信がない私にとって、用紙に質問事項を記入し先生方にご回答いただけるという質疑応答の方法は非常に有難いものだった。

【事務局からのコメント】コメントありがとうございます。今後も、研修会での質問し易い雰囲気づくりや終了後アンケートを用いた質疑応答を継続し、双方向的な研修の場をつくっていきたく思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

- 高校教員でも参考にしたい講座がたくさんある。今後も高校教員の参加枠を設けて頂ければ有難い。

【事務局からのコメント】コメントありがとうございます。高校教員の方々にも参加頂いていることは本拠点研修会の特徴でもあります。今後もぜひご参加をお願いいたします。また、高校教員と大学教員が双方の立場で意見交換ができる会なども検討しております。

- 各研修会の直後に実施されたアンケートと本アンケートの調査目的の違いが分からない。例えば、回答者がどのような組み合わせで研修会に参加したか？その理由は何か？参加頻度はどの程度か？複数の研修会に参加した上でのそれぞれの学びを結びつけることはできたか？最も印象に残っている研修会は？など、問い方を工夫して頂けると、回答側も意欲的にアンケートに取り組めると思う。

【事務局からのコメント】ご指摘ありがとうございます。アンケート項目が研修会直後のものと重なっているものがありませんでした。混乱を招いてしまい、申し訳ございません。また、アンケート調査に関するアドバイスも下さり、誠にありがとうございます。今後は、アンケート調査の設計についても工夫したいと思います。

5 おわりに

次世代型大学教育開発拠点は、平成 28 年 7 月から文部科学省教育関係共同利用拠点として活動を開始し平成 30 年度で第 1 期の活動を終えました。本拠点事業の研修会に多くの方にご参加いただいたこと、また各種ご意見をいただきましたことに深く感謝申し上げます。なお再申請の結果、令和 5 年度までの活動が認められ、令和元年度はその 1 年目にあたります。

本拠点の活動は「リベラルサイエンス教育開発モジュール」、「大学教職員職能開発モジュール」、「専門的職員養成モジュール」の 3 つの領域に分かれて行われています。これらの領域は個々独立して行われているものではなく、カリキュラムマネジメントと教育の内部質保証システム構築といった観点から相互に関連性をもたせて動いているものです。


具体的には、現代の大学に求められる教養教育とは何かという視点とそれに基づく科目開発の取組（リベラルサイエンス教育開発モジュール）をもとに、展開される科目の理解をより深めるため、学生を中心とした授業展開の方法（大学教職員職能開発モジュール）を試行・実施・共有し、目標に沿って科目を体系的に配置したカリキュラムの運営や点検をより効果的なものとするための支援人材の育成（専門的職員養成モジュール）を行うという観点の元、活動をしてきました。

三つのモジュールの関係性を意識したうえで、それぞれのモジュールで展開される研修を体系的に進めていくことの重要性が、運営委員会でも指摘されており、そこに向けて今後も多く教職員にしっかりと受け止めていただける研修プログラムを開発し、展開していく所存です。

令和元年度からは第 2 期の活動に入りましたが年度末にはコロナ禍により、予定していた研修のいくつかが未実施となっております。次年度に延期しオンラインで実施する予定でおります。引き続き本拠点事業への参加者とのコミュニケーションを通じて、教育の実践や運営において求められる内容を追求できる研修プログラムを構築してまいります。

今後とも、みなさまのご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター・副センター長
小湊 卓夫



「九州大学 次世代型大学教育開発拠点 令和元年度 活動報告書」

2020年（令和2年）7月31日 発行

九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
〒819-0395 福岡市西区元岡 744
九州大学 伊都キャンパス センター3号館
<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/>

本書の内容の一部または全部を無断転載することは禁止されています。